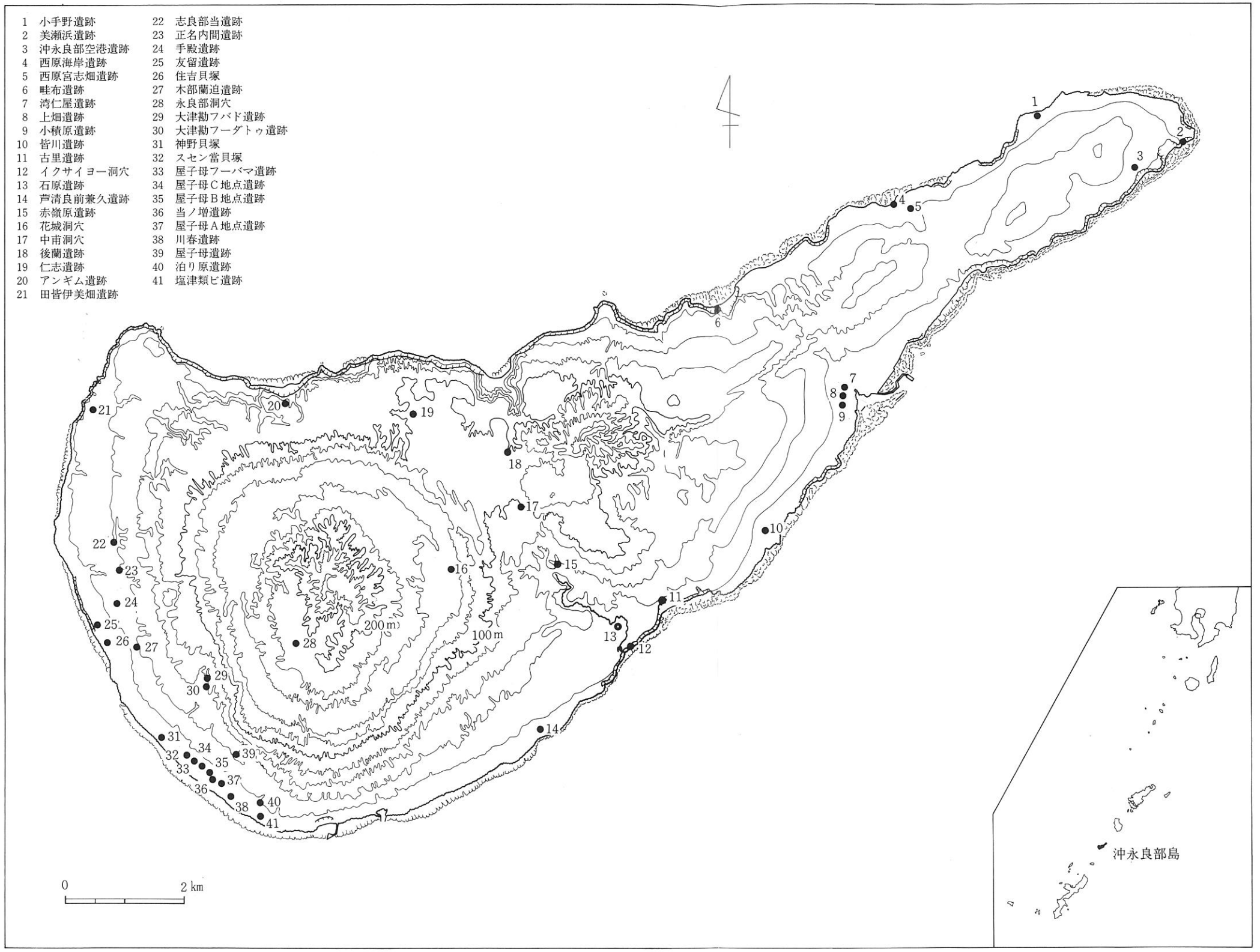


第1図　沖永良部島主要遺跡分布図

一、位置と環境

石原遺跡は、鹿児島県大島郡知名町大字余多字石原305・307・310番地に所在する。当遺跡の立地する沖永良部島は、北緯27度、東経128度、九州本島から西南へ約540kmの洋上にある。奄美諸島に属し、東北に約32kmを隔てて徳之島、南に約33km隔てて与論島に臨む位置にある。亜熱帯モンスーン気候区に属し、四季を通じて温暖な島である。

地質学的にみると、古生層を基盤とした隆起珊瑚礁からなる比較的低平な島で、最高所の大山（オオヤマ・標高246ｍ）、その東側の越山（コシヤマ・標高188.6ｍ）をそれぞれ取り巻くような形で数段の段丘が形成されている。また、大山を囲むような形でカルスト地形が発達し、ドリーネが数多く分布している。年間降水量2,100㎜とやや多雨であるにもかかわらず、全島にわたって石灰岩に覆われているため、雨水は地下に浸透して段丘間の斜面下、ドリーネの低部、あるいは侵蝕の進んだ部分に湧泉・暗川（クラゴウ）となって現れ、地下には昇龍洞や水蓮洞のような石灰岩洞穴を数多く形成している。これらの湧泉・暗川は、表床水の少ない沖永良部島にあっては、集落の立地と形成に大きな関わりをもっている。表床水は、島のほぼ中央部を流れる余多川だけであるが、付近の湧泉・暗川からの補給があり、比較的安定した水量を保っている。

沖永良部島における先史遺跡は、立地の点では、神野貝塚のように海岸砂丘に占地するもの、石原遺跡のように丘陵上に占地するもの、中甫洞穴のように洞穴に占地するものに大別できる。分布をみると、西南部の海沿いに遺跡が最も集中し、大山の周辺、東部の海岸部にも点在している。このような分布状態がみられるのは、北部の海岸は急崖が連なっているのに対し、南部の海岸には幅広い裾礁が発達していることにもよるが、むしろ暗川などの水の湧出地点が限定されていることと、遺跡の成立条件が密接に関係していることがうかがえる。

石原遺跡は、沖永良部島のほぼ中央にあり、海岸から直線距離にして約400ｍ程内陸に入った地点、余多川の西側の段丘上に立地している。余多川は、この丘陵地の縁に沿って流れ、北側には小規模な沖積地を形成している。遺跡のある段丘上は、ドリーネが発達して起伏のあるやや複雑な地形をなし、隆起珊瑚礁の端の小崖によって区画されたようになっており、現在それぞれが平坦に均され、そのまま耕作地として利用されている。

当遺跡は標高38ｍの台地上に位置する石原310番地（310地点）、310地点から東南に続く

緩斜面がドリーネに落ちる肩部に位置する石原307番地（307地点）、307地点から約３ｍの段差下に広がる石原305番地（305地点）に分かれる。305・307・310地点に土器片の散布がみられ、307地点の東南部には土器片の他に貝・獣骨・魚骨の散布もみられた。（第１・２図　図版１・２）　（野田）

註　水が隆起珊瑚礁の隙間を浸し続けて、遂には川そのものが地下を流れるようになったもの。

二、調査の目的と経過

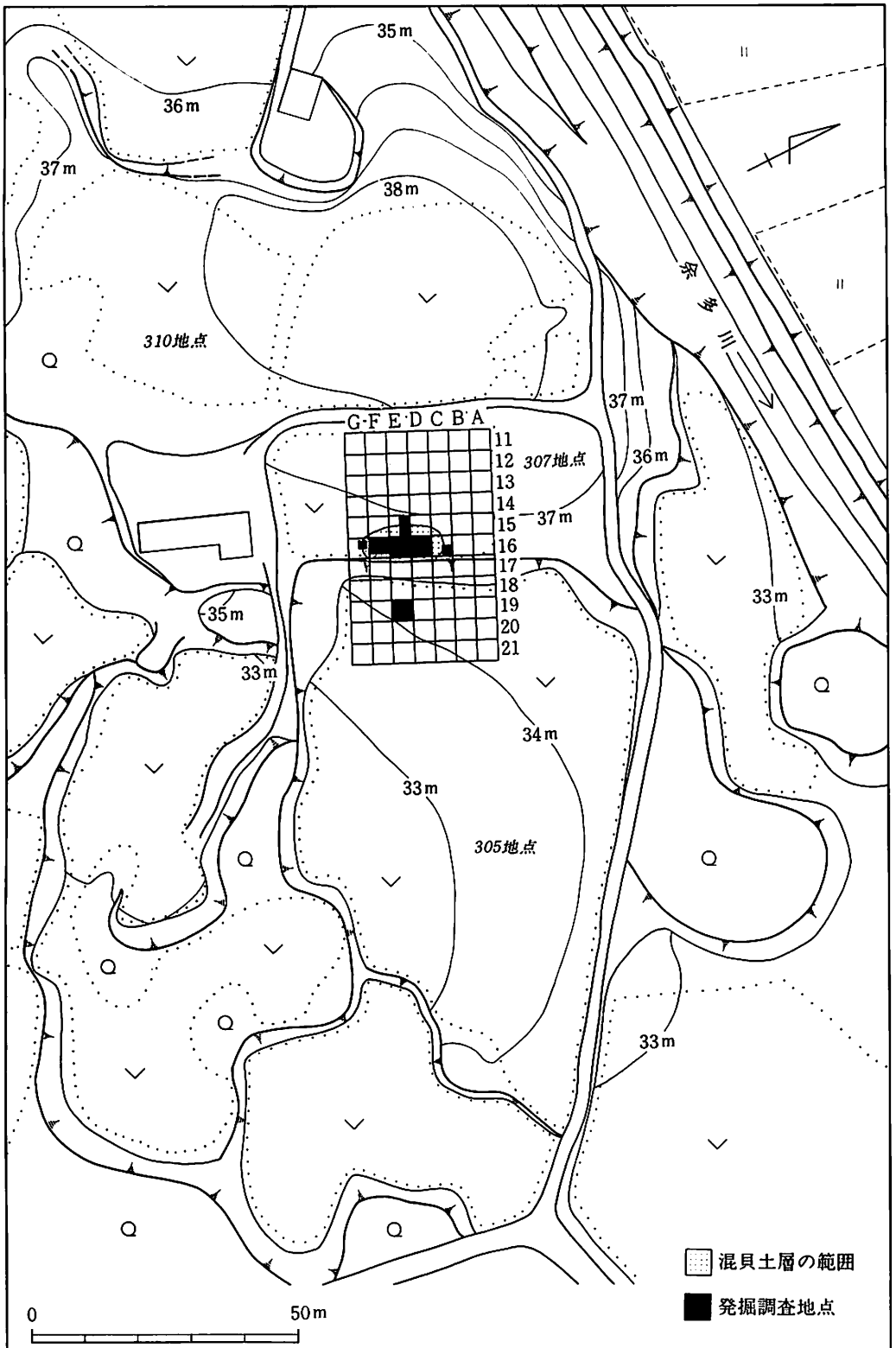
石原遺跡は、段丘上に立地する縄文時代後期に相当する遺跡である。1977年頃、笠利町歴史民俗資料館の中山清美氏によって発見されたもので、その後、天地返し[註]によって壊滅が伝えられていたが、予備調査の結果、307地点の崖の肩には作業がおよばず、わずかながら未撹乱の混貝土層の残存することが認められた。今回の調査は、第１に、遺跡の縁辺部を形成する小貝塚に伴なう何らかの遺構を検出することを目的とし、第２に食物残滓の様態などを探査して、生活の復元を行なうことを目的として行なわれた。

遺跡は、知名町大字余多字石原305・307・310の各番地にまたがって存在しているため、それぞれの地点を305・307・310地点として扱った。

発掘調査は、1987年７月13日より７月24日まで実施された。

まず、それぞれの地点で表面採集を行なった。305・307地点では、いわゆる面縄東洞式・嘉徳式を中心とした土器片などが採集され、特に、307地点の東南部一帯では破砕された貝片が混じる黒色土の未撹乱層の広がりが再確認された。310地点では宇宿上層式を中心とした土器片などが採集されたが、307地点でみられる貝片を含む黒色土の広がりはみられず、305・307両地点とは時期も異なると考えられたので、当初の目的に沿って305・307の２地点を調査することになった。

307地点では、東南部一帯にみられた貝層の広がりと堆積状況を確認するため、Ｃ－16・Ｅ－15・Ｇ－16、さらに、Ｄ－16・Ｅ－16・Ｆ－16の各グリッドを発掘した。その結果それぞれのグリッドで耕作土（Ⅰ層）、撹乱層（Ⅱ層）の下に混貝土層（Ⅲ層）が検出された。Ⅲ層はＣ－16グリッドからＧ－16グリッドにかけて広がっており、Ｄ－16・Ｅ－16グリッドでは、他のグリッドよりも貝層中の貝の含有率が高く、より詳細な調査が必要であると考えられたため、それぞれを４分割して、ａ・ｄの部分を掘り下げた。Ｄ－16ａグ


35m
36m
37m
38m
310地点
G F E D C B A
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
307地点
37m
36m
37m
33m
35m
33m
34m
33m
305地点
33m
Q
混貝土層の範囲
発掘調査地点
0
50m

第2図　地形測量図

リッドでは、西北隅に40×40cmの小グリッドを設定して、混貝土層のブロックサンプリングを行なった。D－16グリッドでは、もう1枚の混貝土層であるV層を掘り終え、さらに貝層の有無を確認するために幅20cmのサブトレンチを設け、IX層を確認した後埋めもどした。

E－16グリッドでは、混貝土層であるV層を確認し、無遺物層であるX層を確認した後埋めもどした。なお、E－16グリッドのIIIc層は東壁近くではほとんど貝片がみられず、貝層の縁辺部に相当するものと考えられた。

305地点では、畑の整地の際の耕作機械による撹乱が予想されたので、遺物包含層の残存状況を確認するためにE－19グリッドの発掘を行なった。II層上面を検出した段階で、耕作機械による部分的な撹乱が確認されたがどの層まで撹乱がおよんでいるかを調べるために、西壁沿いに幅30cmのサブトレンチを設けた。その結果、III層上面までは部分的に撹乱を受けており、かつ、II～V層が遺物包含層であることが確認された。その後、東壁と南壁沿いにもそれぞれ幅30cmのサブトレンチを設け、VI層が無遺物層であることを確認して埋めもどしを行ない、調査を終了した。(第2・3図)　　(徳永)

註　甘蔗畑の地力を回復させるため、大型の機械によって耕土の上下を反転させる工事

三、調査の概要

(1)　307地点

1) 概要

307地点では、C－15、D－15・16、E－15・16、F－15・16、G－15・16グリッドにおよぶ混貝土層を確認した。混貝土層は東北から西南方向へ約20m、東南から西北方向へ約6mの広がりをもっている。

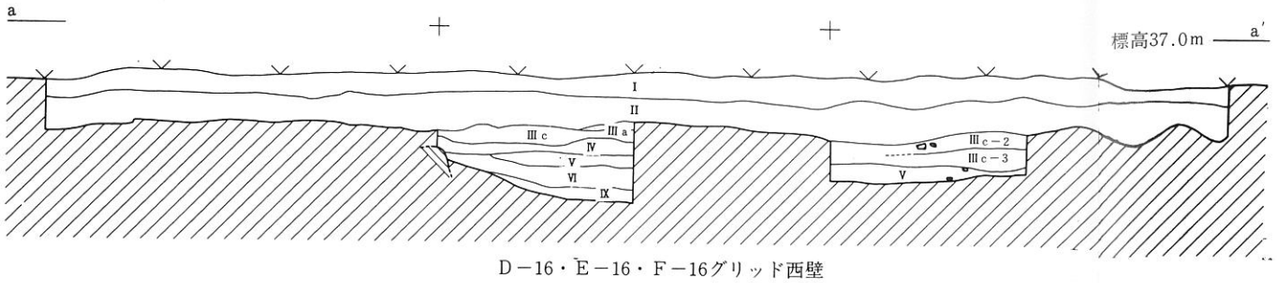
層序

307地点の層序は、土色・土質・貝の混じり具合などにより、I～X層に大別され、III層はさらにIIIa～IIIc層に細分される。

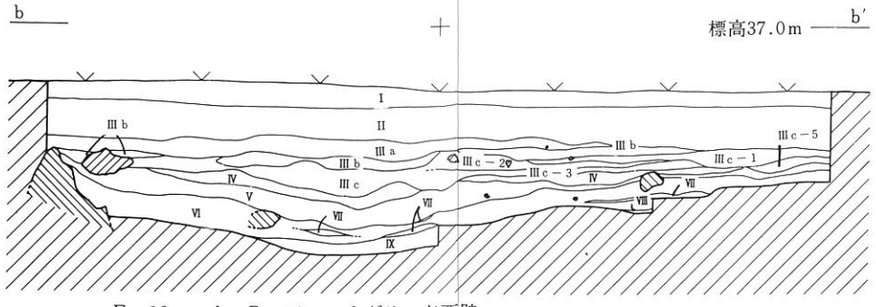
I・II層はほぼ平行に堆積しているが、その他の層は西北から東南へ傾斜している。遺物はX層を除くすべての層から出土するが、III層に最も集中する。

I層　黒褐色を呈する耕作土である。マイマイなどの貝片が混じる。

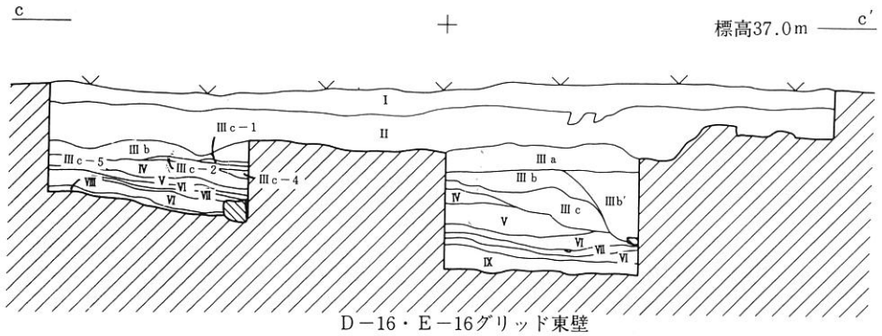
II層　やや粘性を帯びる暗褐色土層で撹乱層である。部分的に黄褐色土・赤褐色粘土・



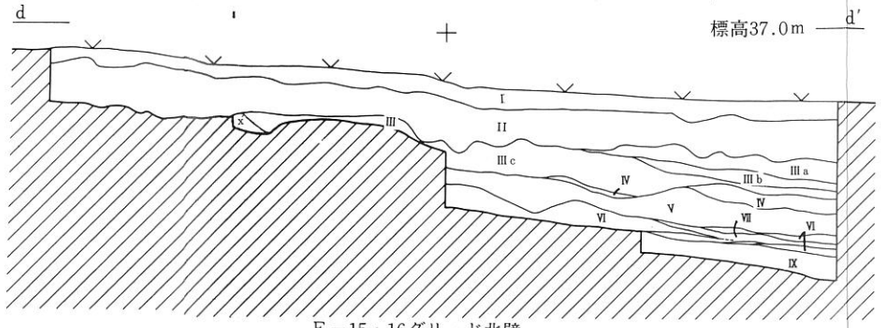
D－16・E－16・F－16グリッド西壁



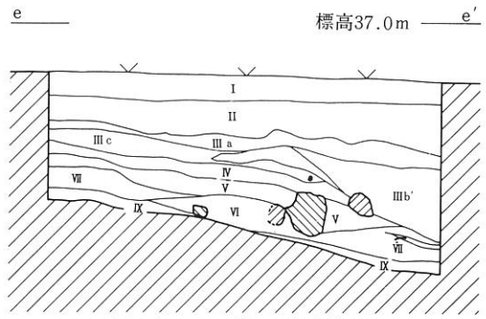
E－16c，d・D－16c，dグリッド西壁



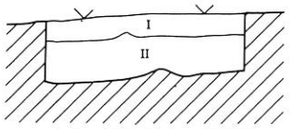
D－16・E－16グリッド東壁



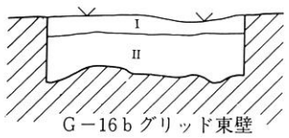
E－15・16グリッド北壁



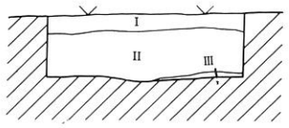
E－16a，cグリッド北壁



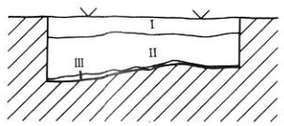
G－16bグリッド南壁



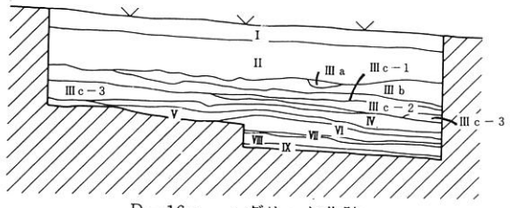
G－16bグリッド東壁



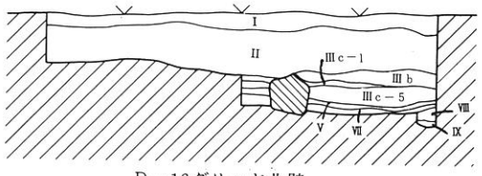
C－16dグリッド南壁



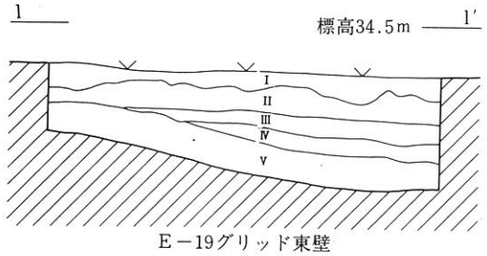
C－16dグリッド東壁



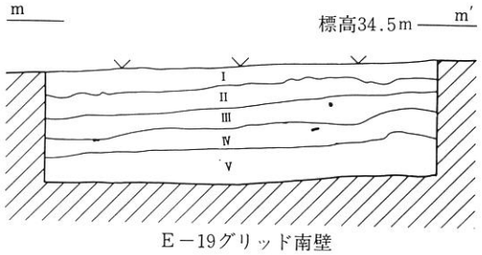
D－16a，cグリッド北壁



D－16グリッド北壁



E－19グリッド東壁

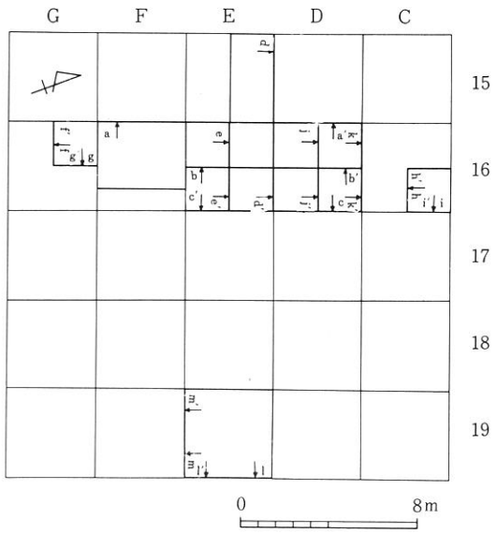


E－19グリッド南壁

305地点層序
- I層：耕作土
- II層：黒褐色土層
- III層：黒褐色土層
- IV層：暗褐色土層
- V層：黒褐色土層
- VI層：明褐色粘土層

307地点層序
- I層：耕作土
- II層：暗褐色土層
- IIIa層：極暗褐色混貝土層
- IIIb層：暗赤褐色土層
- IIIb′層：黄褐色土層
- IIIc層：黒褐色混貝土層
  - IIIc－1：褐色混貝土層
  - IIIc－2：暗褐色混貝土層
  - IIIc－3：黒褐色混貝土層
  - IIIc－4：暗褐色混貝土層
  - IIIc－5：黒褐色混貝土層
- IV層：黒褐色土層
- V層：黒褐色混貝土層
- VI層：暗褐色土層
- VII層：暗褐色混貝土層
- VIII層：暗褐色混貝土層
- IX層：褐色土層
- X層：明赤褐色粘土層

0　4m



第3図　土層断面図

極暗褐色～黒褐色の混貝土がブロック状に混入している部分がある。土器片・貝製品・獣骨・魚骨などが出土した。

Ⅲａ層　粘性の強い極暗褐色の混貝土層である。貝はマイマイを主とするが、マイマイは損傷を受けていないものが多い。土器片・獣骨・魚骨が出土した。

Ⅲｂ層　暗赤褐色土層である。Ⅲａ層よりやや粘性が弱い。破砕された貝の細片をわずかに含む。土器片・石器・貝製品・獣骨・魚骨が出土した。

Ⅲｃ層　黒褐色混貝土層である。マイマイを主とする貝片を多く含む。土器片・獣骨・魚骨が出土した。

Ⅳ層　黒褐色土層である。破砕された貝の細片がわずかに混じる。Ⅲａ・Ⅲｂ層よりさらに粘性が強い。土器片・石器・貝製品・獣骨・魚骨が出土した。

Ⅴ層　黒褐色混貝土層である。破砕されたマイマイを主とする貝小片を多く含む。Ｄ－16ｄグリッド南壁では、この層の上面にマイマイが集中している。土器片・石器・貝製品・獣骨・魚骨が出土した。

Ⅵ層　暗褐色土層である。破砕された貝の細片をわずかに含む。土器片・獣骨・魚骨が出土した。

Ⅶ層　暗褐色混貝土層である。他の層よりマイマイの含有率が低く、海産の貝が多い。Ｄ－16ｄ・Ｅ－16グリッドにおいて検出され、土器片・獣骨・魚骨が出土した。

Ⅸ層　褐色土層である。粘性が強く、炭化物をわずかに含む。

Ⅹ層　明赤褐色粘土層であり、無遺物層である。

各調査区における層序およびＥ－16グリッドにおいて検出されたⅢb'層、Ｄ－16グリッドにおいてⅢｃ層を細分したⅢｃ－１～５層、Ｄ－16ｄグリッドにおいて検出されたⅧ層については、各調査区の所見の項で説明する。（第３図）

出土遺物

土器片・石器・貝製品・骨製品・自然遺物が出土している。土器については、ここで307地点のものと305地点のものとを合わせて分類を行ない、以下それに基づき、各調査区ごとに所見を記述する。その他の遺物についても各調査区ごとに述べることにする。

土器の分類（第１表）

調査面積に比して土器片の出土量は多く307・305両地点を合わせて約6,700点に達した。そのうち文様・器形などの考察に関して分類上意味のあるものは約920点であるが、完形に復元できる資料はわずかに３点が得られたのみで、径を復元できる程度のものも少なく、

小片がほとんどであった。

これらをまず、有文のものと無文のものとに分け、有文のものを文様・器形により、11類（1～10・12類）に、無文のものを口縁部の形態により3類（11・13・14類）に分類した。そして各類を深鉢・壺・鉢の器種に分け、さらに器種ごとに、平口縁のもの(a)、山形口縁のもの（b)、突起付き口縁のもの（c）に細分し、模式図にして第1表に示した。

調整についてみると、307地点の土器は内外器面に石灰分が付着しており、器表面の観察がやや困難で、器面調整の有無ないしその方法が判明しないものが多い。

土器の質についてみると、粘質の胎土に金雲母・石英・砂粒を含み、色調は褐色・赤褐色～褐色を呈するもの（1種）と、それより粘質がやや劣る胎土に細砂・雲母を含み、色調が黄褐色～褐色を呈するもの（2種）とに分かれる。なお、前者の砂粒にはやや粗大な粒子が混じるのに対し、後者のそれは極めて均質である。

以下、各類について記述する。

1類　胴の張る深鉢で、口縁部の肥厚するものとしないものとがある。前者は口唇部に太めの短沈線を羽状に、口縁部には同様のやや長めの沈線を斜め方向にだけ施文する。後者は口唇部に斜め方向の沈線を、口縁部には条虫状の幅広の線を斜め方向と横方向に組み合わせて施文してある。後者の施文具は末端が数mmの幅をもつ動物の骨または貝殻の先端を利用したと思われるが、その種類は明らかでない。両者とも平口縁のもの（a）のみである。内外器面とも調整は不明である。土器の質はすべて1種に属する。

2類　強く外反する口縁部の端を断面三角形に肥厚させ、その肥厚部の外面と内面に刺突連点文を施したもので、頸がしまり胴の張る深鉢になると思われる。平口縁のもの（a）に限られる。内外器面とも調整は不明である。土器の質は1種に属する。

3類　ゆるやかに外反する口縁部に叉状工具を用いて、短沈線・刺突文を施したもので、胴の張らない深鉢である。口縁部にも短沈線・沈線を施文する。山形口縁のもの（b）に限られる。山形部直下には縦方向の文様を、口縁部上端には横方向の文様を施文するのが普通である。調整については不明なものが多いが、内外器面に条痕を残すものもある。土器の質はすべて1種に属する。

4類　断面を帯状もしくは三角形に肥厚させた口縁部に、ヘラ状工具により押し引き文を施文する胴の張らない深鉢である。平口縁のもの（a）に限られる。口縁部の肥厚は微弱なものが多い。調整は不明なものが多いが、内外器面に条痕を残すものもある。土器の質はすべて1種に属する。

器種 / 類	深鉢			壺	鉢	
	a	b	c	a	a	c
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
8						
9 ア						
9 イ						
10						
11						
12						
13						
14						

第1表　土器分類表

5類　口縁部上端と下端に叉状工具もしくはヘラ状工具を用いて、横方向の押し引き文・刺突文を施す胴の張らない深鉢である。口唇部にも押し引き文・刺突文・沈線文を施す。平口縁のもの（a）と山形口縁のもの（b）とがあり、bの山形部直下には、縦方向の文様を施文するのが普通である。bには施文部位がわずかに肥厚するものもある。調整は不明なものが多い。外器面に条痕を残すものもある。土器の質はすべて1種に属する。

6類　口縁部に横方向の刺突文を3、4条施す胴の張らない深鉢である。平口縁のもの（a）に限られる。口唇部にも刺突文を施すものがある。調整は不明なものが多いが、内器面に条痕を残すものもある。土器の質はすべて1種に属する。

7類　口縁部に沈線により区画された刺突文もしくは押し引き文を2、3条施し、その下に鋸歯状の沈線を施文する胴の張らない深鉢である。平口縁のもの（a）と山形口縁のもの（b）とがある。aには口唇部にも沈線文を施すものもある。土器の質はすべて1種に属する。

8類　口縁部の上端と下端に横方向の押し引き気味に施文された一種の刺突連点文・押し引き文を施し、その間に沈線文を充填する胴の張らない深鉢である。沈線文は互いに斜交するものが多い。平口縁のもの（a）と山形口縁のもの（b）と突起付き口縁のもの（c）とがあり、aが半数以上を占め、b・cはこれに次ぐ。aには口唇部にも文様を施すものがある。cは口唇部にも文様を施す。調整は不明なものが多いが、内器面に条痕を残すものもある。土器の質はすべて1種に属する。

9類　口縁部に互いに斜交する沈線・有軸羽状の沈線などを施文するものである。口縁部の上端と下端に、横方向の沈線を施文するもの（ア）としないもの（イ）とがある。両者とも胴の張らない深鉢と鉢とがあるが、深鉢が多数を占め、鉢は少ない。両者とも深鉢には平口縁のもの（a）と山形口縁のもの（b）と突起付き口縁のもの（c）とがあるが、aが多数を占め、b・cは少ない。イの深鉢cには1個の山形突起が付くものと、2個1組の山形突起が付くものとがある。両者とも鉢は平口縁のもの（a）に限られ、深鉢には口唇部に刺突文・押し引き文を施すものがある。またイの鉢にも口唇部に刺突文を施すものがある。調整は不明なものが多いが、深鉢には内外器面に条痕を残すもの、内器面に条痕を残すものがある。土器の質はすべて1種に属する。

10類　口縁部の上端と下端に横方向の突帯を貼り付け、突帯上に押し引き文・刺突文を施し、突帯間に沈線文などを充填するものである。突帯間に文様を施さないもの、口縁部の上端のみに突帯を貼付するもの、突帯を貼付せずに器面を肥厚させるものもある。胴の

張らない深鉢と鉢とがあるが、深鉢が多数を占め、鉢は少ない。深鉢には平口縁のもの（ａ）と突起付き口縁のもの（ｃ）とがある。調整は内外器面とも不明である。土器の質は深鉢は１種に、鉢は２種に属する。

11類　口縁部が肥厚しない無文の土器である。胴の張らない深鉢と鉢と直口の壺とがあるが、深鉢が多数を占め、鉢・壺がこれに次ぐ。深鉢・鉢には平口縁のもの（ａ）と突起付き口縁のもの（ｃ）とがあるが、ａが多数を占め、ｃは少ない。壺は平口縁のもの（ａ）に限られる。深鉢ｃには山形突起が１つ付くものと２個１組の山形突起が付くものとがある。調整は不明なものが多いが、深鉢・鉢には内器面に条痕を残すものがある。また深鉢はすべて１種に属するが、鉢には２種に属するものがある。

12類　口縁部が断面三角形もしくはカマボコ形に肥厚し、口縁部直下から胴部上半にかけて粘土紐を縦・横方向に貼り付け、その上に叉状工具による刺突連点文を施し、粘土紐間に沈線文を施す壺である。平口縁のもの（ａ）に限られる。内外器面とも調整については不明である。土器の質は１種に属するものと２種に属するものとがある。

13類　口縁部が断面三角形もしくはカマボコ形に肥厚する無文の土器である。胴の張らない深鉢と壺とがある。深鉢には平口縁のもの（ａ）と突起付き口縁のもの（ｃ）とがあるが、ｃは少ない。壺は平口縁のもの（ａ）に限られる。内外器面とも調整は不明である。土器の質はすべて１種に属する。

14類　口縁部が帯状に肥厚する無文の土器である。胴の張らない深鉢と鉢とがある。深鉢には平口縁のもの（ａ）と突起付き口縁のもの（ｃ）とがあるが、ｃは少ない。鉢は平口縁のもの（ａ）に限られる。深鉢・鉢ともに調整については不明である。土器の質はすべて１種に属する。

底部には平底・丸底気味の平底・丸底・尖底・高台付き底部とがある。調整は不明なものが多いが、平底には内器面に条痕を残すものもある。土器の質は、平底・高台付き底部はすべて１種に属し、丸底気味の平底・丸底・尖底はすべて２種に属する。

307地点からは２～11類のものと平底が出土している。305地点からは１・３～14類のものと平底・丸底気味の平底・丸底・尖底・高台付き底部が出土している。

以下、口縁部と胴部は１～14類の分類に従い、底部は平底・丸底気味の平底・丸底・尖底・高台付き底部とに分けて記述する。分類に当てはまらないものはその他として取り扱う。

（藤崎）

2）各グリッドの所見

D－16ａグリッド

層序（第３図）

Ⅰ～Ⅴ層まで掘り下げ、さらにサブトレンチによりⅥ層・Ⅶ層・Ⅸ層上面を確認した。当グリッドではマイマイの堆積状況によりⅢｃ層をⅢｃ－１～３層に分層した。Ⅲｃ－１層は褐色混貝土層である。大形・完形のマイマイと小形の巻貝を多く含む。土器片・獣骨・魚骨が出土した。Ⅲｃ－２層は暗褐色混貝土層である。大形・完形のマイマイと小形の巻貝をわずかに含む。土器片・石器・獣骨・魚骨が出土した。Ⅲｃ－３層は黒褐色混貝土層で、主として大形・完形のマイマイおよびその小片を含む。チョウセンサザエ・タカラガイなどもわずかに含む。土器片・獣骨・魚骨が出土した。

出土遺物

土器（第４図　図版９）

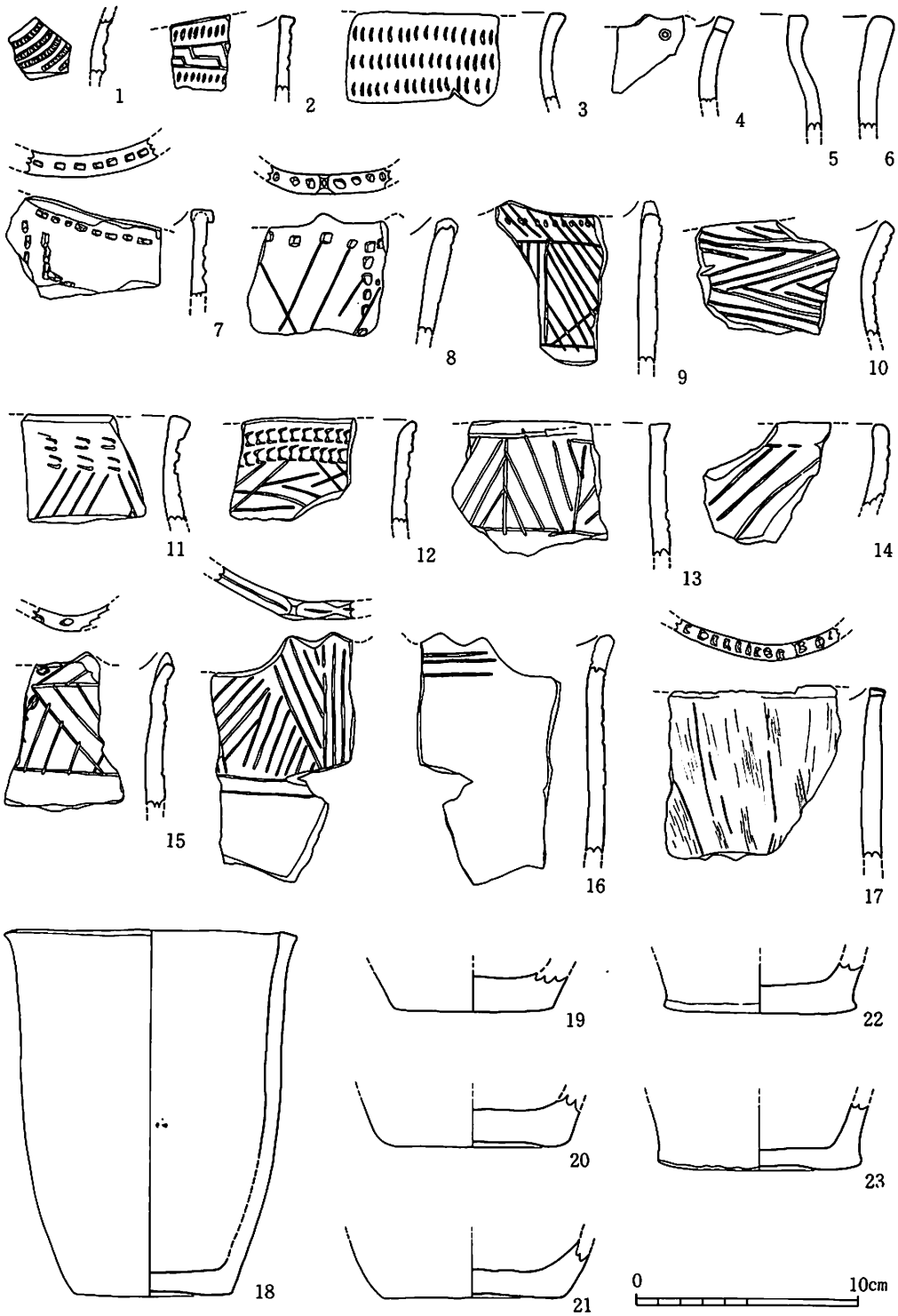
Ⅱ～Ⅴ層の各層で出土した（第２表）。多くはその特色の捕捉に困難な小片であり、前出の「土器の分類」に当てはまるものは以下の通りである。４類（１）、５類（７）、６類（３）、７類ｂ（２）、８類ａ（11・12）・ｂ・ｃ（８）、９類ア深鉢ａ（13）・深鉢ｂ（10）・深鉢ｃ・鉢ａ、11類深鉢ａ（５・６・18）・深鉢ｃ（４）。９・15は、文様帯を区画する横方向の沈線の上側にも文様がおよぶもので、９には刺突文と斜め方向の沈線が、15には斜め方向の沈線が施されている。８類・９類ア深鉢には口唇部に刺突文を施すもの（８・15）がある。

その他のものとして２点を図示した。16は頂が３つある山形突起をもつ有文の深鉢である。外器面には横方向の沈線およびその上側に５～７本の斜め方向の沈線群を交互に施文する。山形突起の内面には横方向の沈線を３本施文し、口唇部にも横方向の沈線を施している。17は突起を有する深鉢で、口唇部のみに刺突文を施し、外器面に条痕がみられる。

底部（19～23）はすべて平底であるが、20・21・23はわずかに上げ底気味になっている。

石器（第８図－２・４　図版19）

当グリッドで出土した石器は、破片を含めて石斧３点、敲石１点である。第８図２は石英閃緑岩製の石斧である。打裂によって粗く成形しているが、図の表裏面ともに刃部付近および打裂の際にできた稜部とその付近にだけ強い磨研が認められる。刃端は磨耗が著しく、極端に鈍磨している。刃端の欠損ないし慢滅の後、磨る、もしくは搗くための用具に転用されたと考えられる。重量318ｇ。４は砂岩製の転石を利用した敲石である。図の裏



第４図　Ｄ－16ａグリッド出土土器実測図

Ⅲｂ層；６・16・21・23　Ⅲｃ－１層；８・13・20・22
Ⅲｃ－２層；７　Ⅲｃ－３層；１～４・14・15・17・19
Ⅳ層；18　Ⅴ層；５・９～12

面の上部を欠損している。周縁に敲打痕、表裏面中央に敲打による浅いくぼみが生じており、敲打痕は特に上下端に著しい。図の右側の側面には使用による稜が生じている。

骨・貝製品（第９・10図－１・２・４・５・10・14・16　図版12～14）

１はイモガイ製の小玉である。小形のイモガイの螺塔部を利用したもので殻頂部に１孔を有するものである。周縁部および孔の内縁に磨研が施されている。直径1.0cm、孔径0.3cmである。２は円筒形を呈していたと思われる骨製品の残欠である。頂端部から径0.6cmの孔が穿たれている。深さは0.5cm程で、下まで抜けていなかったと思われる。表面にはにぶい光沢が生じており、稲妻形の深い沈線と浅い短沈線が刻まれている。長さ1.25cm、残存部の最大径1.2cmである。10はヤコウガイの体層部の破片に加工痕の認められるものである。周縁部は打ち欠いたままで磨研は認められないが、外面の結節肋の一部には、その取りはずしを意図したものと思われる強い磨研痕が認められる。貝匙の未製品ないし製作途中の廃棄品であろう。14はゴホウラの背面を利用した貝輪片である。表面の一部を除き磨研が施されており、丁寧な作りである。一端に両面から穿たれた漏斗状の２孔がある。孔の貫通部の径0.3cm、孔の上縁部すなわち漏斗口径0.7cmである。16はハリセンボンの下顎骨である。当初は垂飾品とも考えられたが、明らかな加工痕は認められず、自然遺物である可能性が高い。明確な判断を下すべく他の類例を待ちたい。[註] ４・５はＤ－16ｂグリッドから出土したものである。４は五角形を呈するシャコガイ製の垂飾品である。鞍状の起伏を持っており、シャコガイの背縁部を意図的に利用したものと思われる。全面に丁寧な磨研が施されており、上端に両面から穿たれた漏斗状の孔がある。貫通孔径0.35cm、漏斗口径0.55cmである。５は二等辺三角形を呈していたと思われる垂飾品である。貝種は不明である。全面に丁寧な磨研が施され自然面は残っていない．両角に両面から穿たれた漏斗状の２孔がある。貫通孔径0.25cm、漏斗口径0.6cmである。

自然遺物（第９表）

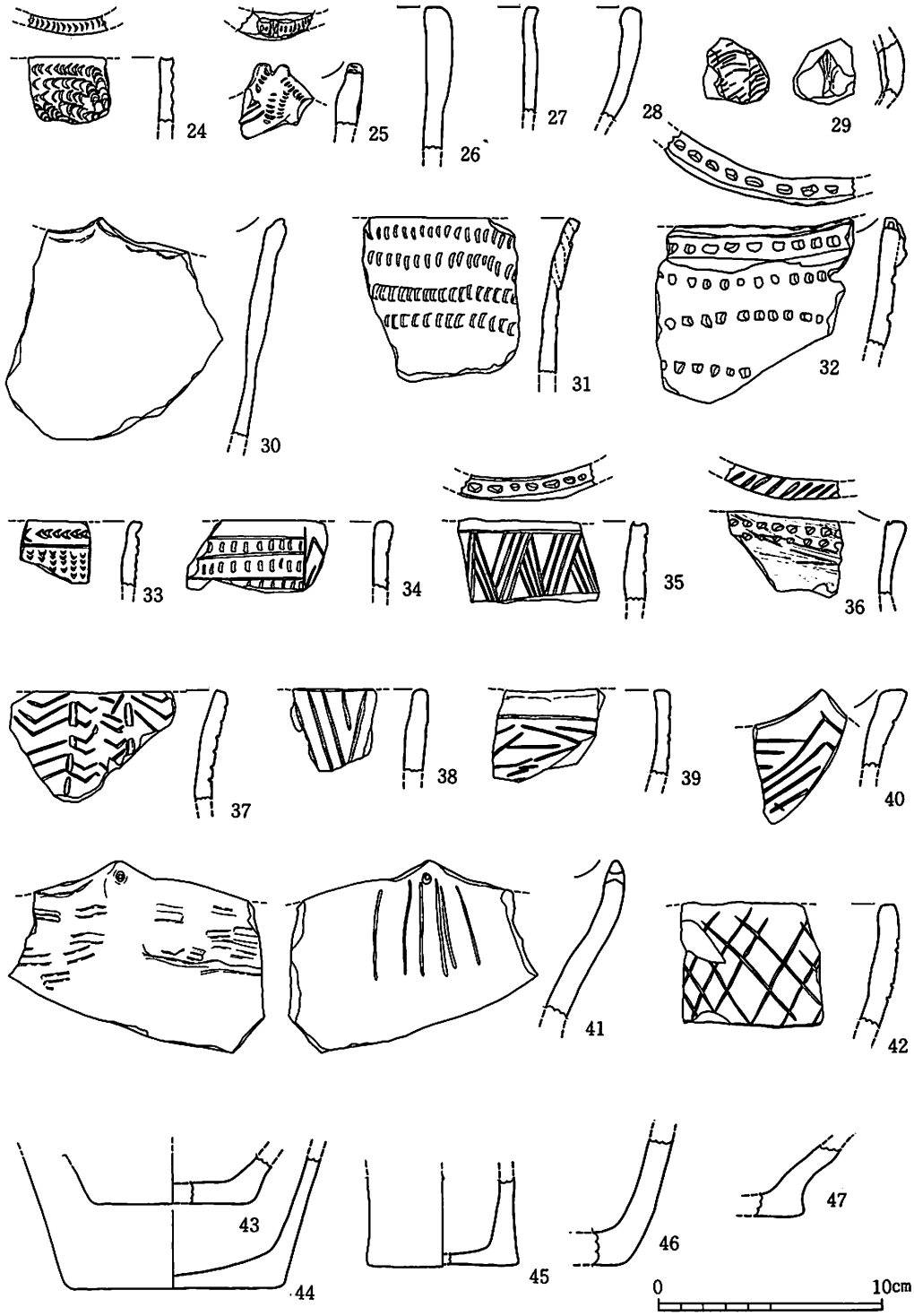
Ⅰ～Ⅳ層の各層で貝・獣骨・魚骨などが出土した。（参照　第９表）　（森）

註　脱稿後、鹿児島県教育委員会『下山田Ⅱ遺跡・和野トフル墓』1988　で類似品を確認した。

Ｄ－16ｄグリッド

層序（第３図）

Ⅰ～Ⅶ層までを堀り下げ、さらにサブトレンチによりⅦ層・Ⅸ層上面を確認した。Ｄ－



第5図　D－16dグリッド出土土器実測図

Ⅲb層；28～30・32・38・39・41・42・44
Ⅲc－1層；25　Ⅲc－5層；26　Ⅳ層；27・37・43
Ⅴ層；24・35・46・47　Ⅵ層；31・33・36・40　Ⅶ層；34・45

16ａグリッドと同様にⅢｃ層をマイマイの堆積状況により、Ⅲｃ－１～５層に分層した。Ⅲｃ－４層は暗褐色混貝土層である。完形のマイマイが特に多い。海産貝はコマキモノガイなどの小形の巻貝が主である。Ⅲｃ－５層は黒褐色混貝土層である。Ⅲｃ－４層と同様に完形のマイマイが多く、コマキモノガイなどの海産の小形の巻貝が主である。いずれも完形のマイマイが層上面に貼り付くように堆積し、土器片・自然遺物が出土した。Ⅷ層は暗褐色混貝土層である。マイマイを主とする貝片を含み、粘性が強い。土器片・自然遺物が出土した。

出土遺物

土器（第５図　図版10）

Ⅱ～Ⅷ層の各層から出土した（第２表）。

前出の「土器の分類」に当てはまるものは以下の通りである。３類（36）、４類（24）、６類（31）、８類深鉢ａ（33・34）、９類ア深鉢ａ（35・39）・イ深鉢ａ（38・42）・ｂ（40）・鉢、10類深鉢ｂ（32）、11類深鉢ａ（26・27）・ｃ（30）・鉢ａ（28）。８～10類の深鉢には口唇部に文様を施すもの（24・32・35）がある。

その他のものとして４点を図示した。25は山形突起を有する口縁部片である。突起中央には刻みが入れられている。外器面に沈線と刺突文、口唇部に刺突文を施す。29は器面から剝落した貼り付け突帯の一部である。全体に浅く弱い沈線を施す。37はやや外反する深鉢の口縁部片である。外器面にＶ字状沈線と浅い縦方向の押し引き文を施す。41は山形突起を有する鉢の口縁部片である。山形部に焼成前に両側から孔径0.2cmの孔が穿たれている。外器面には２本１組の不規則な短沈線を施す。内器面には穿孔部分の下位に縦方向の沈線６本を施す。

以上の他に底部片が出土しており、５点を図示した。すべて平底であり、稜の明確なもの（43～45）、稜の不明確なもの（46）、くびれ気味のもの（47）がある。

貝製品（第９・10図－６・７・11～13・15・17　図版12～14）

Ⅱ・Ⅲｂ・Ⅲｃ－２・Ⅲｃ－５・Ⅳ・Ⅴ層から計８点が出土した。６は１孔を有するシャコガイ製の垂飾品である。一部破損するが復元形は整った二等辺三角形を呈する。シャコガイ内面の波状の起伏を利用して成形してあり、磨研は丁寧であるが、背面には助の痕が残っている。中高で両側辺にゆるやかなくびれがあり、全体として鞍状を呈している。片側の耳の部分が残っていてそこに刻みが入っている。漏斗状の孔を両面から穿ってあり、貫通孔径0.3cm、漏斗口径0.7cmである。現存部の長さ5.1cm、最大幅5.1cmである。７はサ

ラサバテイ製である。体層下面を取り込んで磨研したものであるが、破損がひどく、原形を推定することは困難である。両面から穿たれた漏斗状の3孔が認められる。その他器縁に刳り込んだようなくぼみが1つある。殻表の磨研は丁寧であるが、裏面は自然面のままである。用途は不明である。11はヤコウガイの体層部の破片である。図の左側には一見磨研の痕のような丸みが認められる。一般にヤコウガイ製品の成形は肋の走行方向を強く意識しながら行なわれるものであるが、これは肋に無関係な方向をとっており、磨研の痕とは判定し難い。また結節肋の取りはずしなどの加工の痕も認められない。製作途中の廃棄品か。12は用途不明の半欠品である。メンガイと思われる赤い二枚貝の背面を抜いて、その抜いた形のままに磨研してあるようである。殻表面の磨研は入念とはいえず、放射肋が辛うじて消える程度である。折損部に孔径0.3cmの1孔が認められるが、ヒトデの食孔の可能性が強い。貝輪様に使用したものか[註]。13はシャコガイ製品の残欠である。全体に入念な磨研が施され、一部に肋の痕が残るが、その他には凹凸はほとんどみられない。貝輪片とも思われるが、積極的な証拠がなく、用途は不明である。15はゴホウラの背面を利用した貝輪片で全体の4分の1程度の残欠品である。腐蝕が著しいが磨研は丁寧に施されており、自然面は残っていない。17はメンガイと思われる製品の一部で、12と同様に貝輪様に使用したものでないかと思われる。全体に磨研が施され、孔の縁には特に入念である。

自然遺物（第10・11表）

Ⅰ～Ⅷ層の各層から貝類・イノシシを主とする獣骨・魚骨が出土した。　（山下）

註　白木原和美「徳之島の先史学的所見」『南日本文化』3号　1970
伊仙町教育委員会『面縄貝塚群』1985

E－16aグリッド

層序（第3図　図版4）

X層最上面まで掘り下げを行ない、Ⅰ～Ⅵ・Ⅸ・X層の8枚の層を確認した。Ⅲa層は極暗褐色混貝土層で粘性が強く、マイマイを比較的多く含む層である。Ⅲc層は黒褐色混貝土層でⅢa層と比べ粘性がやや劣り、貝の細片を多量に含む。Ⅳ層は黒褐色土層で貝は細片で極めて少ない。Ⅴ層は黒褐色混貝土層で小形マイマイが多く含まれる。Ⅵ層は暗褐色土層でわずかに貝の破片を含んでいる。Ⅸ層は褐色土層で粘性が強く炭化物を含む。

出土遺物

土器（第6図　図版10）

Ⅰ～Ⅵ層から出土した(第２表)。

前出の「土器の分類」に当てはまるものは以下の通りである。６類（61)、７類ａ（59)・ｂ（60)、８類深鉢ａ（48)・ｃ（55)、９類ア鉢ａ（58)・イ深鉢ａ（49・50・53・54)、10類深鉢ａ（51)・鉢ｃ（52)、11類深鉢ａ（56・57)・ｃ（67)。７類には口唇部に押し引き文ないし刺突文を施すもの（54・55）がある。52は口縁部に頂が２つあると思われる山形突起を有する。55は口縁部が強く外反しており、上面観は隅丸方形を呈すると考えられる。64～66は有文の、ただし形式の不明確な胴部の破片である。詳細な文様構成は不明であるが、64は９類イ、66は８類に属すると思われる。

他に底部片が出土しており、４点を図示した。これらはすべて平底であるが、ややくびれるもの（67）とそうでないもの（63・68・69）とがある。

自然遺物（第10表）

Ⅰ～Ⅵ層の各層から出土した。マイマイ・チョウセンサザエなどの貝類、イノシシなどの獣骨および魚骨が主体をなしている。（下田・舛本）

Ｅ－16ｄグリッド

層序（第３図）

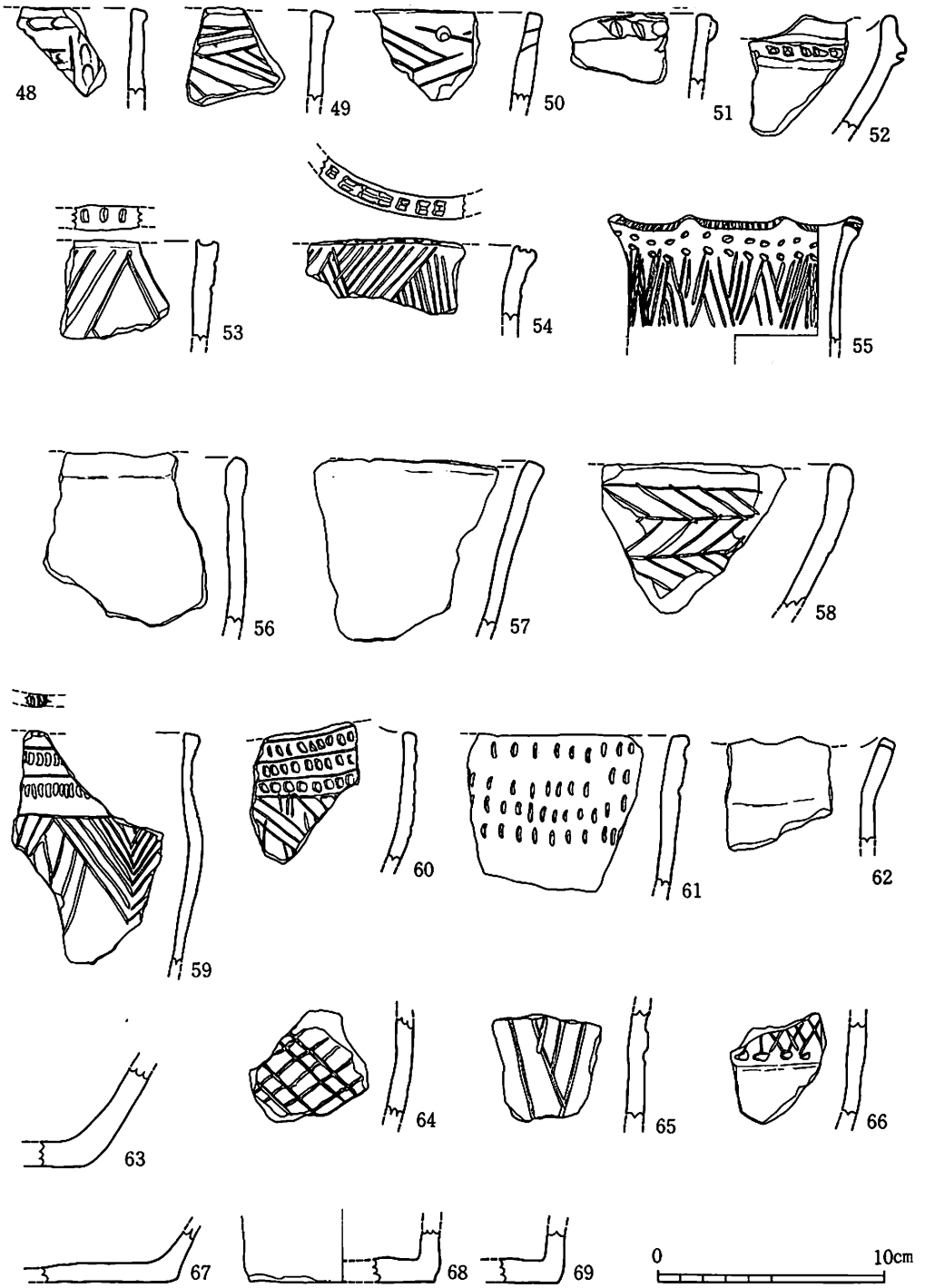
当グリッドではⅩ層最上面まで掘り下げ、Ⅰ～Ⅶ・Ⅸ・Ⅹ層を確認した。また、東南側でⅢｂ層と隣接して他のグリッドではみられない層が１枚検出され、これをⅢｂ′層として取り扱った。この層はⅢｂ層との境は明瞭ではないが、黄褐色を呈し、Ⅲｂ層よりさらに粘性が劣り、貝片をほとんど含まないという理由でⅢｂ層と区別される。なお、Ⅲｂ′層下部からは多数の土器片・獣骨・魚骨が出土している。また、Ⅳ層最上面では焼土が確認された。平面形は長径約72cm、短径約54cmの不整楕円形を呈しており、約２～５cmの厚さでⅢ状に堆積していた。焼土内からは土器片・貝片・獣骨・珊瑚片・炭化物が検出された。

出土遺物

土器（第７図　図版11）

Ⅰ～Ⅵ層の各層から出土した（第２表)。

前出の「土器の分類」に該当するものは次の通りである。２類（70)、３類（85)、５類ａ・ｂ（83)、７類ａ（71)・ｂ（84)、９類ア深鉢ａ（80・82)・イ深鉢ａ（76・81)・ｂ（89)・鉢ａ（88)、11類深鉢ａ（74)・ｃ（75)・壺（73)・鉢ａ（72)。なお、９類には口唇部に文様を施すもの（76・80・88）がある。



第6図　E－16aグリッド出土土器実測図

II層；65　III層；49～54・57・61・64
IV層；55・56・58・59・60・62・68・69　V層；49
VI層；66・67・63

その他のものとして5点を図示した。77～79は深鉢の口縁部片で、86・87は有文の胴部片である。77は口唇部に押し引き文、口縁部に沈線文と押し引き文とを有する。78は叉状工具で口唇部に1条、口縁部に2条の刺突文を施している。79は口縁部に叉状工具による1条の刺突文を有する。86は逆「く」字状に屈曲する胴部片で、屈曲部に半裁竹管状工具による刺突文を施し、その上部に斜め方向の沈線文を施している。87は貼り付け突帯上に刺突文を施したものである。この他に、口唇部のみに刺突文を有する平口縁の深鉢などがある。

以上の他に底部片が出土している。すべて平底であり、2点（90・91）を図示した。90は内器面に縦および横方向の条痕をとどめている。

石器（第8図－3　図版19）

小形の磨石状のもので、V層から出土した。平面形は円形を呈し、横断面は隅丸長方形に近い。表裏面は非常に平滑であるが、周縁は全周にわたって荒れており、表裏面と周縁との境は明確な稜をなしている。重量は189gである。一見して人工を思わせるが、特殊な結晶帯が両面にまたがって生じており、石灰岩の中に時として発生する特殊な団塊であるとの見解もある。人工品、自然礫いずれとも判断し難いが、とりあえずここに記述しておき、類似品の増加を待つことにする。[註]

貝製品（第9図－3　図版14）

巻貝製の垂飾品の小片で、Ⅲa層から出土した。一辺の一部とその端の小さな切れ込みを残すだけで、全形は不明である。全面に磨研が施されており、2つの孔が観察できる。2孔とも両側から漏斗状に穿たれている。また、図の表面には6本の沈線状のものがみられ、それは一辺に平行な2本とこれに斜交する4本とで構成されている。

自然遺物（第10・11表）

Ⅰ～Ⅶ層の各層から検出された。いずれも陸産のマイマイを主体とするが、特にⅢb・V層からは、獣骨・魚骨が多量に出土した。（福本）

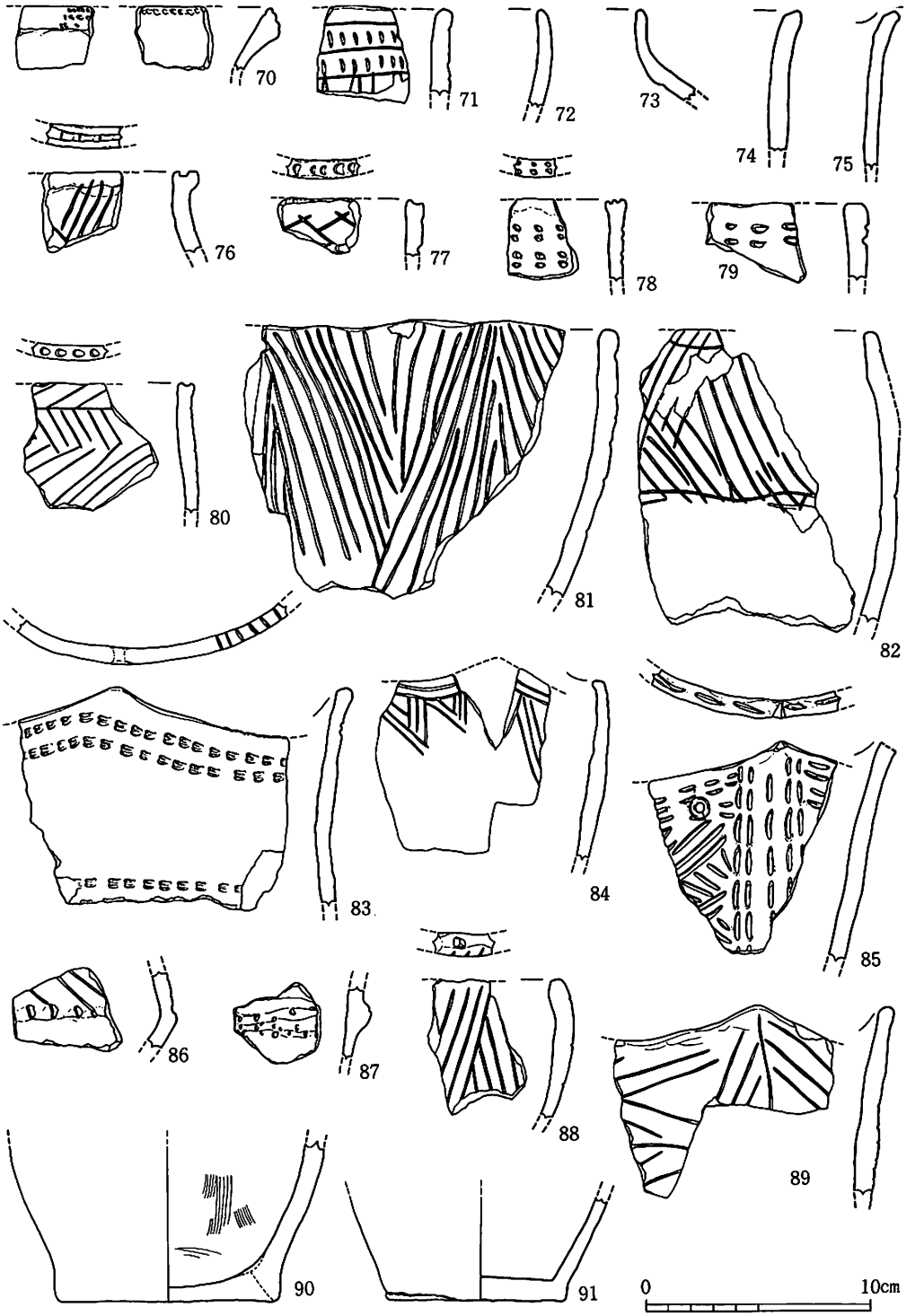
註　犬田布貝塚で類似品が報告されている。

C－16d・E－15bd・G－16bグリッド

層序（第3図）

これらのグリッドでは混貝土層（Ⅲ層）の広がりを確認するため掘り下げを行なった。

C－16dグリッドではⅠ～Ⅲ層およびX層が確認された。Ⅲ層は西・南壁側でのみ見られ、暗褐色で、破砕された貝片をわずかに含んでいる。遺物としては土器片が数点出土し



第７図　Ｅ－16ｄグリッド出土土器実測図

II層；79　III層；73・75・80・86・87
III ｂ層；72・76・78・81～83・88・89・91
IV層；90　V層；74・85　VI層；70・71・77・84

ている。E－15ｂｄグリットでも、Ⅰ～Ⅲ・Ⅹ層が確認された。Ⅲ層は暗褐色混貝土層で貝・珊瑚の小片を含む。これはｄグリッドではほぼ全面にみられるものの、ｂグリッドではみられなかった。遺物として土器片・貝製品および自然遺物が出土している。G－16ｂグリッドでは、Ⅰ・Ⅱ層を掘り下げたところ全面にⅢ層が検出された。Ⅲ層は黒褐色混貝土層で、破砕されたマイマイを主とする貝片や珊瑚の小片を含んでいる。なお以上で述べたⅢ層は前出の概要で述べた、分層されたⅢａ・Ⅲｂ・Ⅲｃ各層のいずれに対応するか不明である。

出土遺物

土器

各グリッドから出土しているが、小片のため図示していない。ほとんどのものがⅠ層およびⅡ層からの出土である。これらは胴部片と底部片とに分けられ、胴部片には無文のものと有文のものとがある。有文のものの中には斜め方向に沈線を施したもの、格子状に沈線を施したものがある。しかし、いずれも小片であり器形・文様について詳細を述べることは困難である。底部片は３点ですべて平底であるが、くびれるものとそうでないものとが見られる。

貝製品（第９図－９　図版12）

E－15グリッドⅡ層より大型の貝製垂飾品が出土した。シャコガイ製で厚さ約0.6㎝、縦10.3㎝、横12.2㎝を測る重厚な貝製品であり、いわゆる龍形貝玉に属する。表裏および側面はよく磨研されて、凹凸が目立たなくなる程度に滑らかに調整されており、いくつかの階段状の刻みと両側から穿孔された漏斗状の４つの小孔を持っている。図の右上部分を大きく欠失している他に、先端の欠失が数ヶ所みられる。孔は主に裏面から深く穿孔されており、孔の縁径は、表面で約0.3～0.5㎝、裏面で0.6～0.8㎝で、そのうちの３孔には紐擦れのような痕が観察できる。貫通孔の径は0.2～0.3㎝。表面には幅約0.2㎝の１本の深い刻線が図の左から２つの孔を通過して刻まれており、切断線であると考えられる。また裏面にも一番下の孔に重なって短い刻線が観察できる。　（舛本）

（２）　305地点

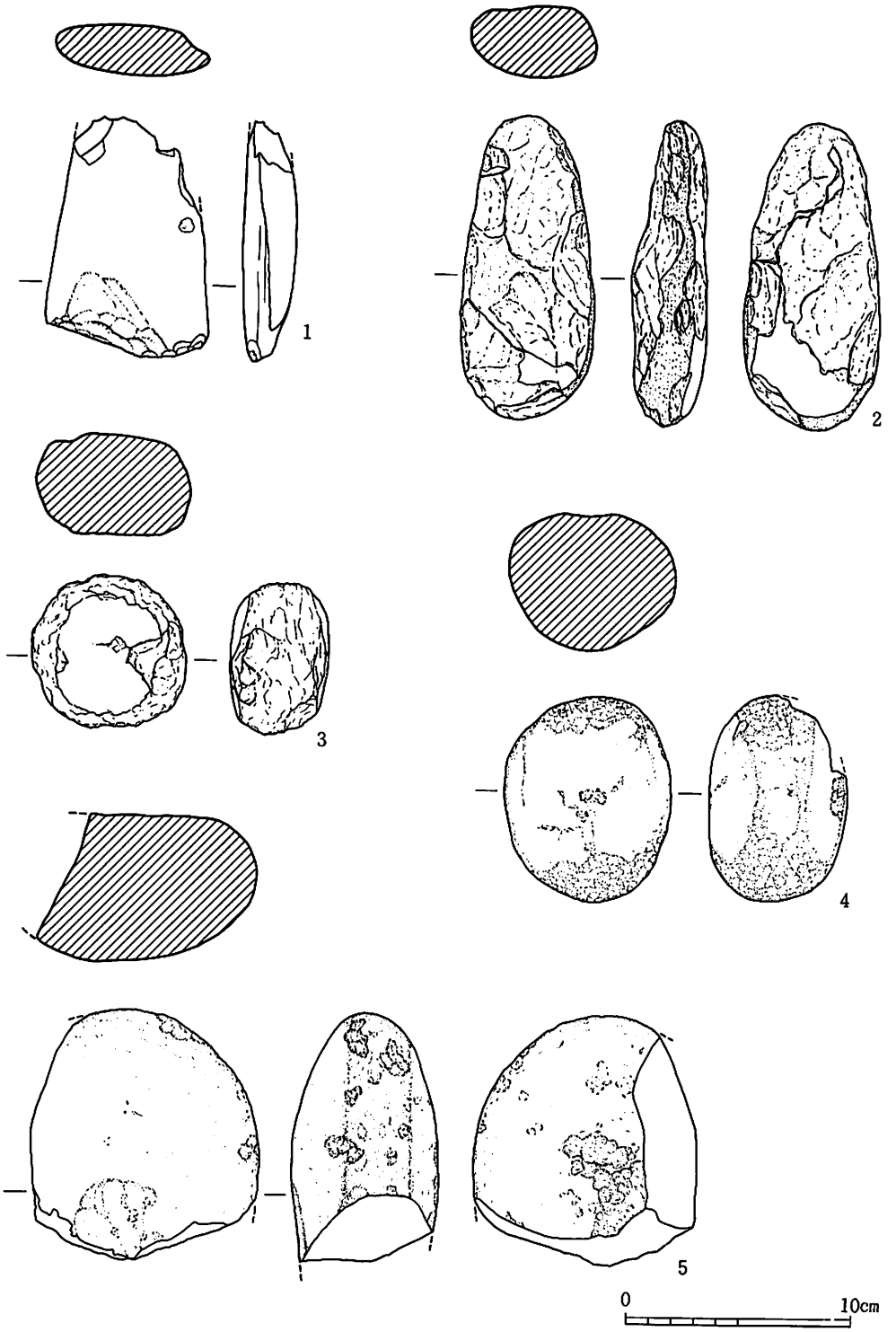
1）概要

305地点では、隆起珊瑚礁の小崖下に位置しているE－19グリッドを発掘し、混貝土層の有無と遺物包含層の残存状況の確認を行なった。

グリッド名	類	1	2	3	4	5		6	7		8			9ア				9イ				10				11					12	13			14			その他	底部			胴部	計
	器種	深鉢	深鉢	深鉢	深鉢	深鉢		深鉢	深鉢		深鉢			深鉢			鉢	深鉢			鉢	深鉢			鉢	深鉢		壺	鉢		壺	深鉢		鉢	深鉢		鉢		平底	尖底	高台付		
	層序	a	a	b	a	a	b	a	a	b	a	b	c	a	b	c	a	a	b	c	a	a	b	c	c	a	c	a	a	c	a	a	c	a	a	c	a						
D-16a	Ⅲb										1		1(1)		1			3		1(1)		1				10						1						2	13			168	202 (2)
	Ⅲc－1													2				3(1)									2											1	3			22	33 (1)
	Ⅲc－2						1(1)																																3			28	32(1)
	Ⅲc－3					1		1		1				4	2	3(2)		11(1)	1	1						6	3(1)					1						2(1)	6			130	173(5)
	Ⅳ														1																							1	1			35	38
	Ⅴ										2	1		1	1			1	1							2												1(1)	5			68	83(1)
	計					1	1(1)	1		1	3	1	1(1)	7	5	3(2)		18(2)	2	2(1)		1				18	5(1)					2						7(2)	31			451	561(10)
D-16d	Ⅲb							1							1			14		1			1(1)			5	1		1									2	11			306	344(1)
	Ⅲc－1										2(1)							2	1																			1	2			97	105(1)
	Ⅲc－2																		1																				1			51	53
	Ⅲc－3																	4								1																52	57
	Ⅲc－5										1(1)			1				3(2)	1							3													4			49	62(3)
	Ⅳ							1			1			1				9(1)	1(1)							4												2	12			160	191(2)
	Ⅴ				1			1(1)						1(1)				6	3(1)		1					1												1	14			184	213(3)
	Ⅵ			1(1)				1			2								1							1													1			54	61(1)
	Ⅶ							1			2															3													3			54	63
	Ⅷ																																									1	1
	計			1(1)	1			5(1)			8(2)			3(1)	1			38(3)	8(2)	1	1		1(1)			18	1		1									6	48			1,008	1,150(11)
E-16a	Ⅲ							1						1				4				1			1	1													2			2	13
	Ⅳ								1	1			1				1									3				1									1			1	10
	Ⅴ										1																																1
	Ⅵ																																						2				2
	計							1	1	1	1		1	1			1	4				1			1	4				1									5			3	26
E-16d	Ⅲ													4(1)				2								4	1	1										1(1)	2			99	114(2)
	Ⅲb′					1(1)	1(1)							3	2(1)			9(2)	2(1)	1	1(1)					3			1									1(1)	6			84	115(8)
	Ⅳ																	1																					2			10	13
	Ⅴ			1(1)										1	2(1)			1								2	1												2			39	49(2)
	Ⅵ		1						1	1					1				1							1												2(1)	1			28	37(1)
	計		1	1(1)		1(1)	1(1)		1	1				8(1)	5(2)			13(2)	3(1)	1	1(1)					10	2	1	1									4(3)	13			260	328(13)
E-19	Ⅱ										1			3(2)	1	2		3(1)		1						19	4		1		1	14	1	1	17	1	1	5	20		1	1,300	1,397(3)
	Ⅲ			1(1)			2	1(1)	1		1			9(1)	2(1)	2(1)		24(7)	4	4(2)		5(4)		1	2	46	7		4	1	1	16		1	9			16	42	1	1	1,429	1,633(18)
	Ⅳ				2(1)			2(1)	1		1	1		9(1)	6	1		21(5)	6	2(1)						22	6					1						8	36			604	729(9)
	Ⅴ	2			3	1(1)	3(3)	6			2	1		12(2)	5(1)	3(1)		10(4)	2(1)	1	1					15			2									11	37			584	701(13)
	計	2		1(1)	5(1)	1(1)	5(3)	9(2)	2		5	2		33(6)	14(2)	8(2)		58(17)	12(1)	8(3)	1	5(4)		1	2	102	17		7	1	2	31	1	2	26	1	1	40	135	1	2	3,917	4,460(43)

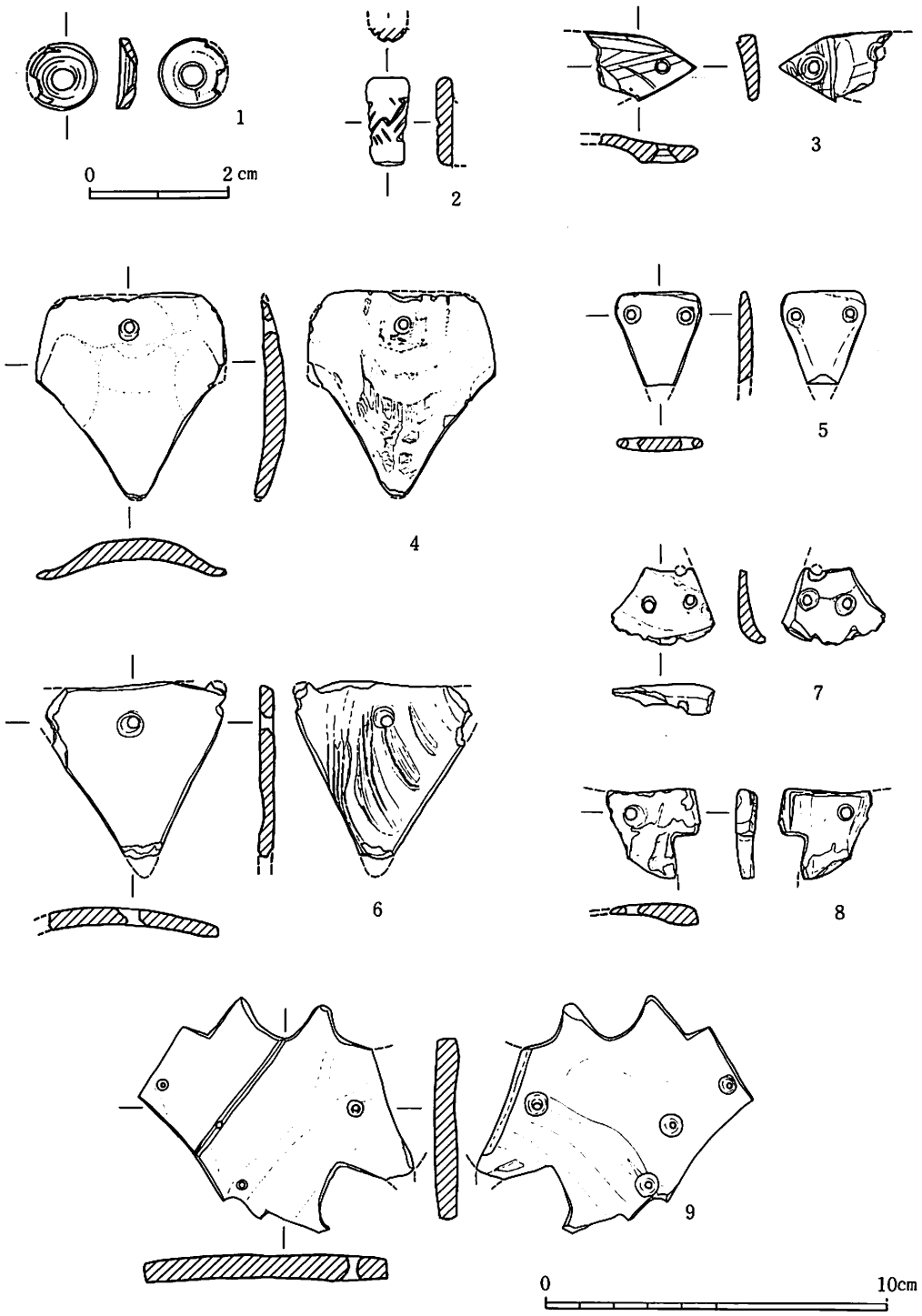
（　）は口唇部に施文された土器片の数

第２表　出土土器統計表



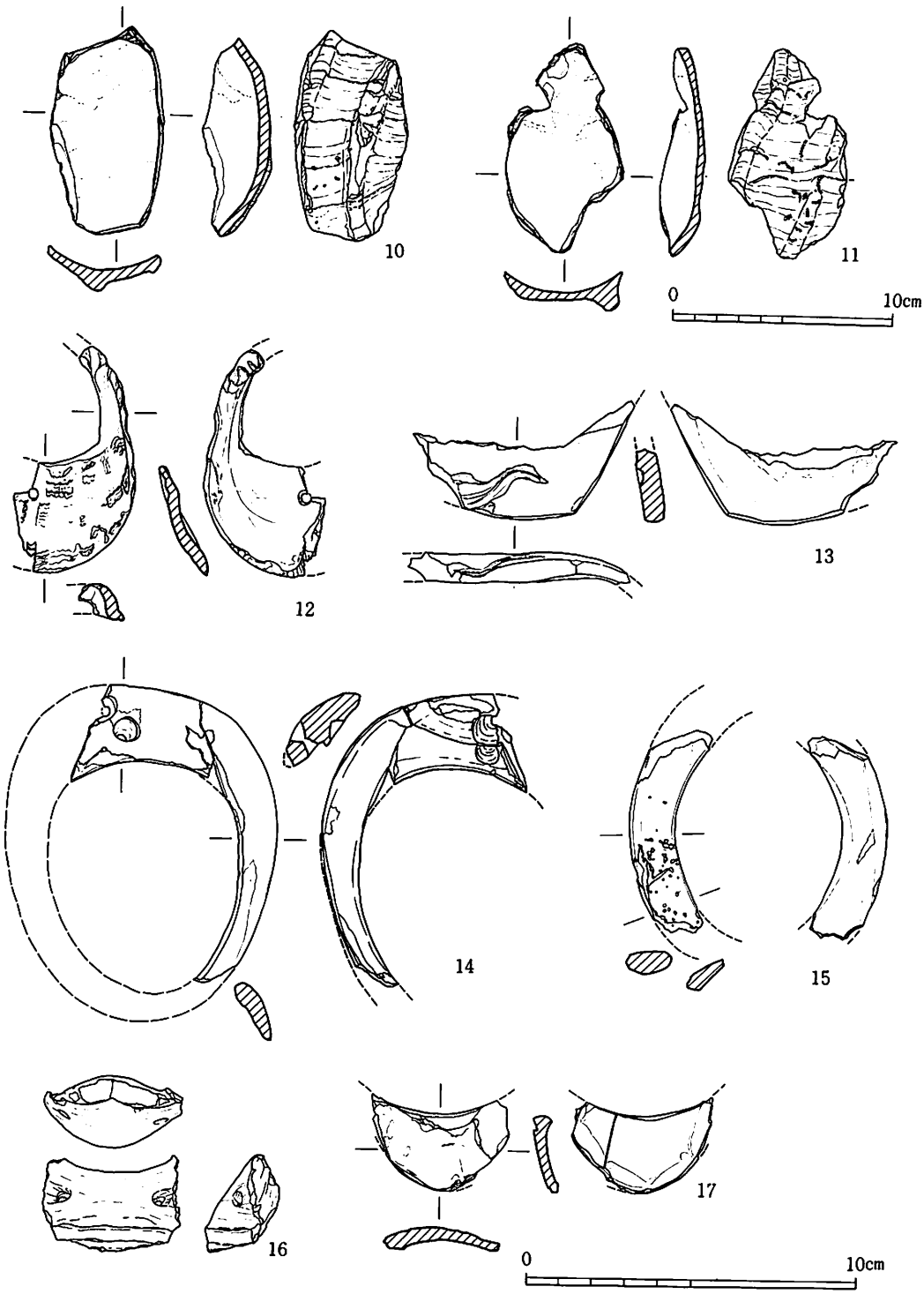
第 8 図　石器実測図(1)

307地区表採；1・5　D－16aグリッドⅢb層；4
D－16aグリッドⅣ層；2　E－16dグリッドⅤ層；3



第9図　出土貝製品実測図(1)

D－16グリッドII層；4・5　D－16aグリッドIIIb層；1
D－16aグリッドV層；2　D－16dグリッドIV層；6・7
E－16dグリッドIIIa層；3　E－15グリッドII層；9　307地点表採；8



第10図　出土貝製品実測図(2)

D－16ａグリッドⅢｂ層；10　D－16ａグリッドⅢｃ－13層；14・16
D－16ｄグリッドⅡ層；13　D－16ｄグリッドⅢｂ層；12・17
D－16ｄグリッドⅢｃ－２層；15　D－16ｄグリッドⅢｃ－５層；11

II層上面を検出した段階で耕作機械による部分的な撹乱が確認されたため、撹乱の状況を確める目的で、西壁沿いに幅30cmのサブトレンチを設けた。この断面に拠り、層位ごとに掘り下げた結果、III層上面までは部分的に撹乱を受けており、かつ、II～V層が遺物包含層であることを確認した。さらにサブトレンチを東壁と南壁沿いに設け、VI層が無遺物層であることを確認した。なお、307地点でみられたような混貝土層はみられなかった。

2) グリッドの所見

層序（第3図　図版7）

層は、全部で6層が確認された。I・II層は、ほぼ平行に堆積しており、V・VI層は、東南側へ傾斜する。III層上面までは撹乱をうけている。各層から、土器片・石器・自然遺物などの出土が見られるが、特にIII・IV層から集中して出土している。

I層　厚さ9～29cmで、褐色を呈する耕作土である。

II層　黒褐色を呈する厚さ12～32cmの土層である。I・III層の土が部分的にブロック状に混入しており、畑の整地の際に撹乱されたものと思われる。8・9・11～14類を中心とする土器片・獣骨・魚骨などが出土している。

III層　黒褐色のしまりの良い土層で、南側で24cmと最も厚く、北壁近くで薄くなり、消失している。上面には、撹乱によると思われる凹凸が部分的にみられる。遺物としては、3・5～14類を中心とする土器片・石器・獣骨・魚骨が出土している。

IV層　わずかに砂を混じえた暗褐色土層である。III層と同じく、北壁側ではみられない。厚さは、南壁側の最も厚いところで18cmを測る。4～11・13類を中心とする土器片・石器・獣骨・魚骨が出土している。

V層　厚さ28～35cmの粘性の強い黒褐色土層である。下面は暗黄褐色を呈する。全体的に遺物の量は少ないが、4～11・13類を中心とする土器片・獣骨が出土している。

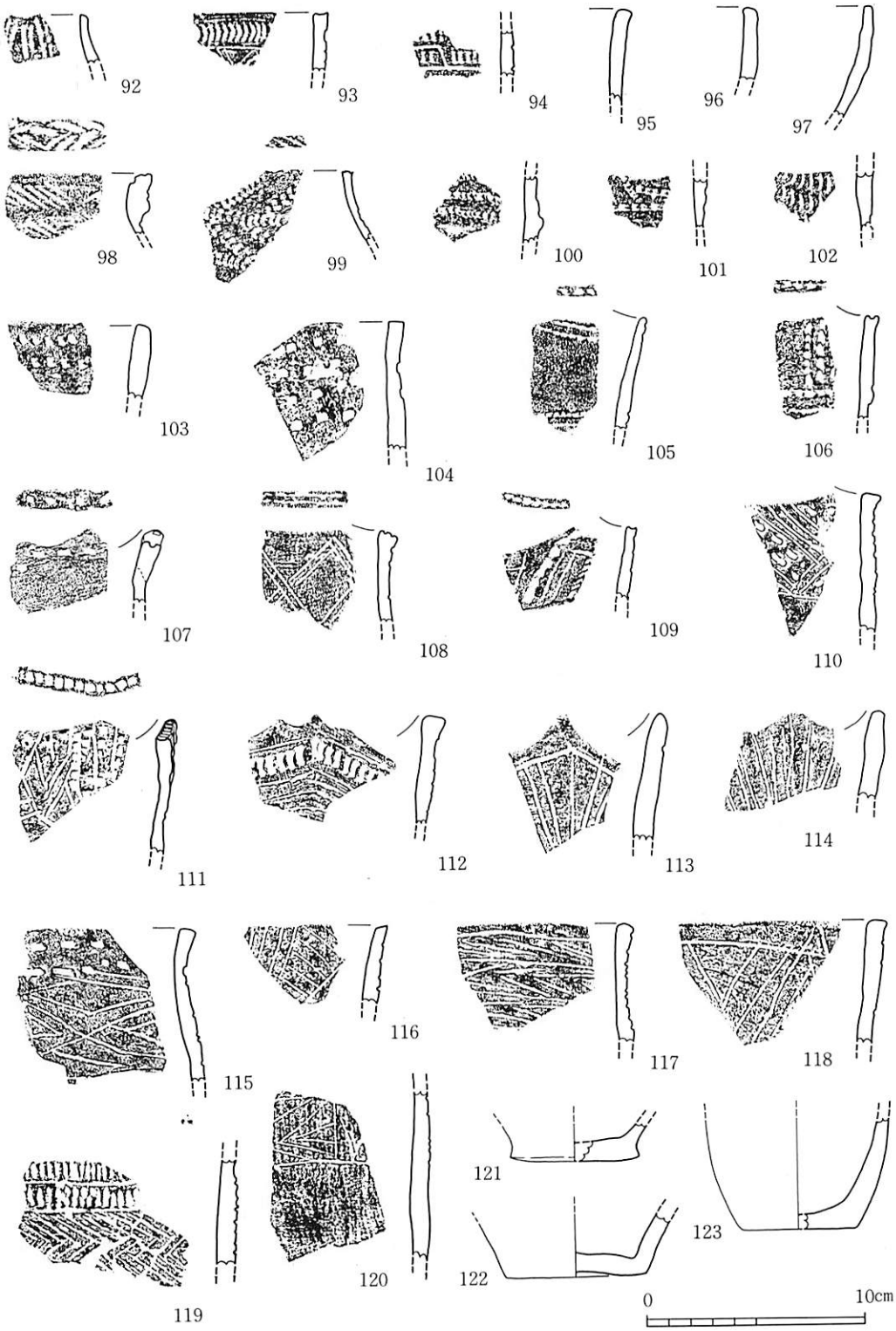
VI層　明褐色を呈する粘土層で、無遺物層である。　（友口）

出土遺物

土器（第11～14図　図版15～18）

I～V層の各層で出土した（第2表）。

前出の「土器の分類」に当てはまるものは以下の通りである。1類（98・99）、3類（167）、4類（100・125・130）、5類深鉢a・b（105・106・168）・胴部（133）、6類（103・104・131・132）、7類深鉢a・胴部（119）、8類深鉢a（93・94・115・126・171）・b（112・134）、9類ア深鉢a（117・118・140・145・170）・b（109・110・113）・c（176）・胴



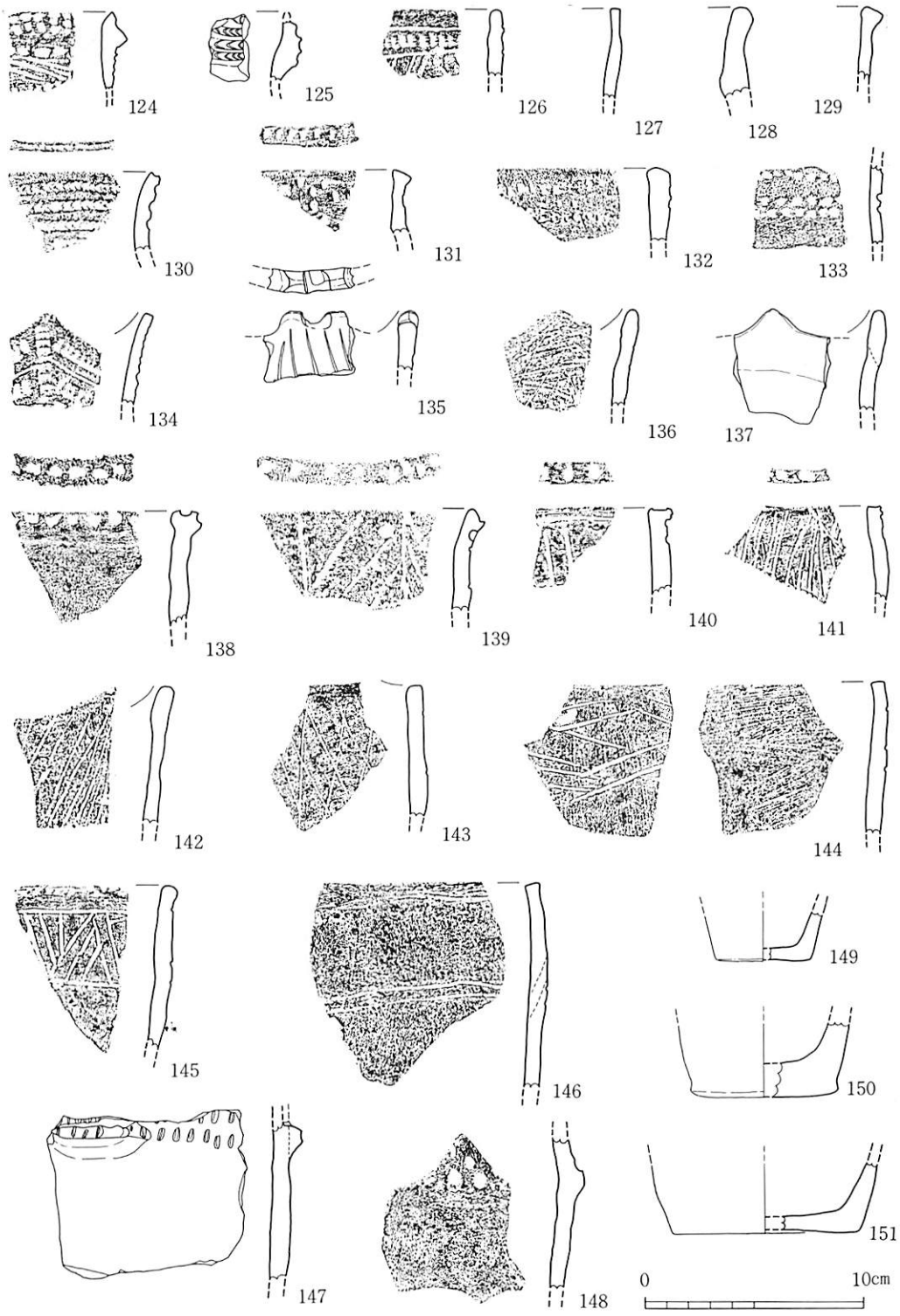
第11図　E－19グリッド出土土器実測図(1)

V層；92～123

部（120）・イ深鉢ａ（116・139・141・144）・ｂ（108・136・142・143）・ｃ（114・135・172・173）・鉢ａ、10類深鉢ａ・ｃ（175）・胴部（148・174）・鉢ａ（95・127・128・154）・胴部（152）・ｃ（165）・鉢ａ（164）。4～6・9・10類の深鉢には、口唇部に施文するものもある。

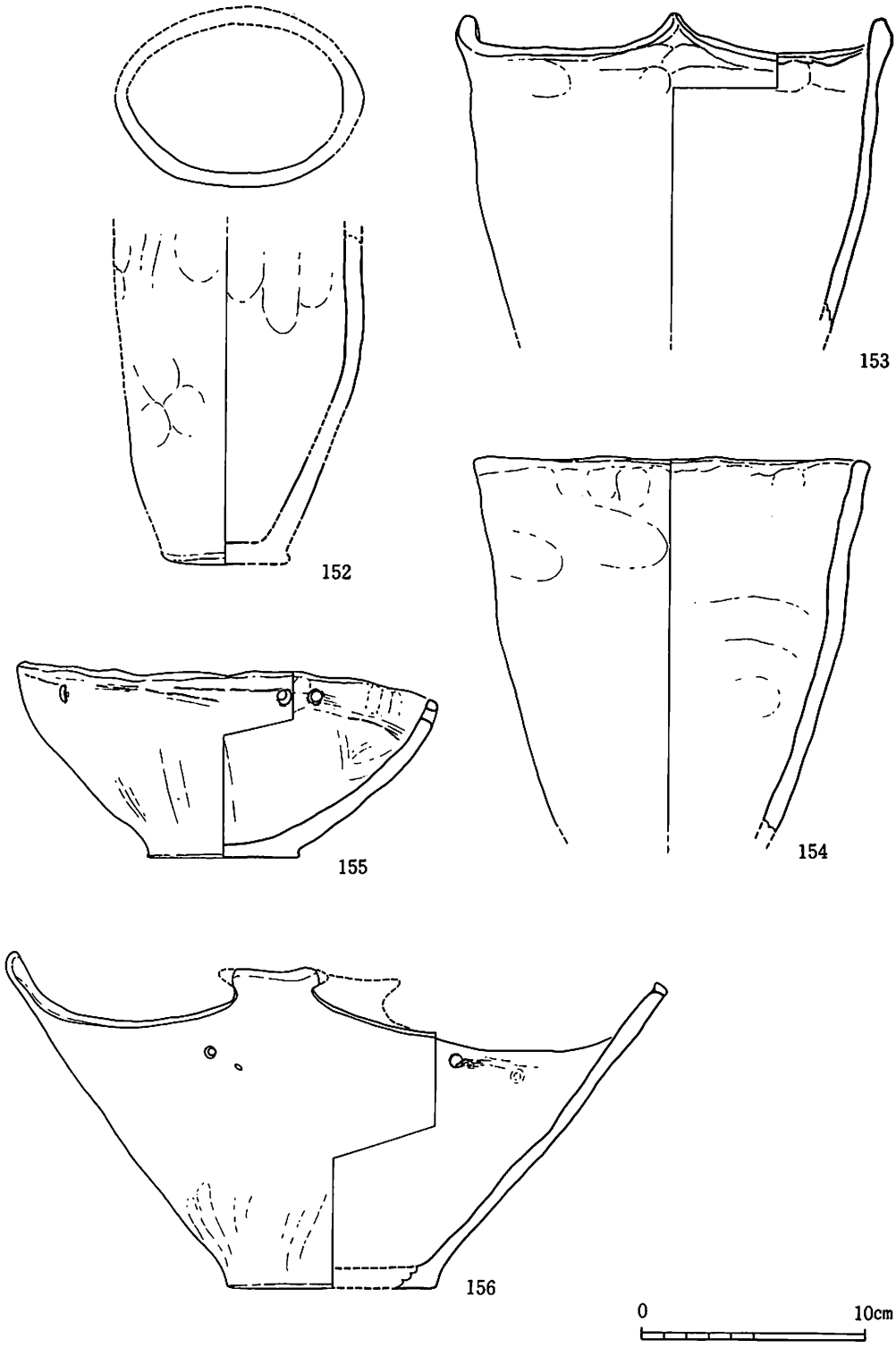
174はかなり胴が張る特殊な器形で、口縁部の上面観は方形を呈すると思われる。152は口縁部を欠失しているが11類深鉢ａに属すると思われ、上面観は楕円形を呈している。155は口縁部を一部欠失し、上面観は楕円形であるが、152よりは円に近い。口縁部に焼成前にあけられた4つの孔がある。孔はほぼ均等に配されており、本来は5つあったと思われる。内外器面には縦および横方向の条痕が残っており、特に口縁部では横方向の条痕が顕著である。156はⅢ層下面で一括して出土した（図版8下）。口縁部が山形を呈し、さらにその突端にリボン状の突起をもつ。口縁部付近に両側から穿たれた漏斗状の孔が10個ある。これらは断口をはさんで対をなしており、補修孔の可能性が高い。内外器面には他にも孔を穿とうとしたらしい数個の丸いくぼみがみられるが、断口との明らかな関連が見られず、これらがどのような意味をもっていたかは不明である。また、内外器面のところどころに、一見ハケ目を連想させる横方向の調整痕が残っており、特に内器面の口縁部付近に顕著である。

その他のものとして9点を図示した。92・107・111・124・138は口縁部片で、すべて深鉢である。92はやや胴の張る器形になると思われる。ヘラ状の施文具で上から下へ押し引き文を施している。107は山形突起を有し口唇部と口縁部に1条ずつ横方向の刺突文を施している。111は山形口縁部片である。口唇部に連点文風の押し引き文を左から右へ施している。山形突起下にも同様の連点文風の押し引き文を上から下に施しその後に縦および斜め方向の沈線文を施している。124は口縁部を三角形に肥厚させ、肥厚部には斜め方向の押捺刻文を施し、肥厚部下には横方向の押し引き文と斜め方向の沈線文を施している。138は口縁部に粘土帯を貼り付けて肥厚させ、口唇部と口縁部に1条ずつ刺突文を施している。146は口縁部の上端と下端に浅い2本1組の沈線文を廻らしている。169は口縁部をかすかに帯状に肥厚させ、口唇部に1条と口縁部に7条の横方向の刺突文を施すもので、山形口縁になると思われる。177は口唇部に1条と口縁部に2条の横方向の刺突文を施している。101・102は有文の胴部片である。101は斜めおよび横方向の押し引き文を施し、その下に斜め方向の沈線文を施したものである。102は先端の円いヘラ状工具の端で刺突した一種の爪形文を横方向に3条施している。147・178は外耳付き土器片である。両者



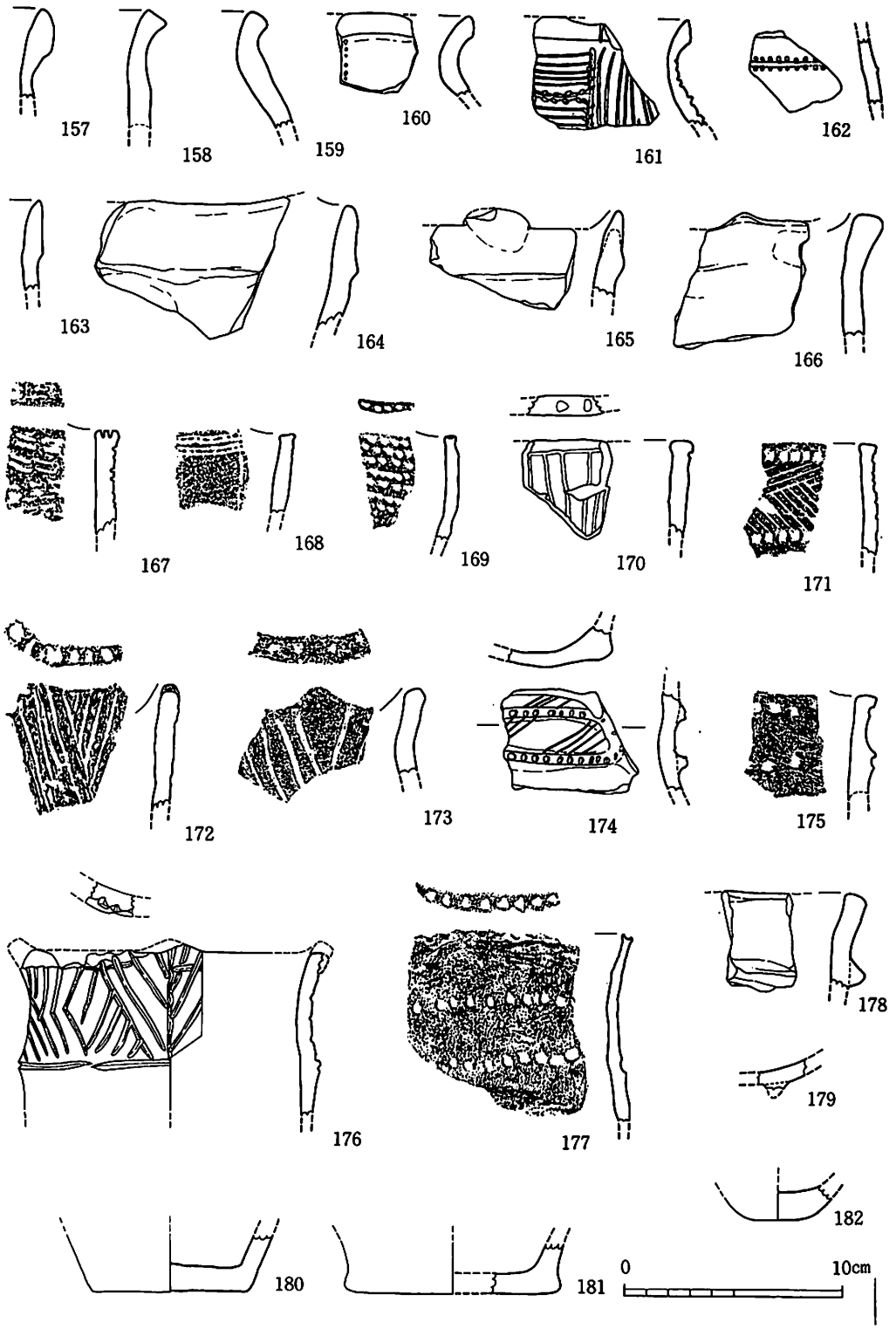
第12図　E－19グリッド出土土器実測図(2)

Ⅳ層；124～151



第13図　E－19グリッド出土土器実測図(3)

II層；152　III層；153・154・156　III層IV層接合；155



第14図　E－19グリッド出土土器実測図(4)

II層；161・164・165・170・178・182

III層；157～160・162・163・166～169・171～177・179～181

とも貼り付けによる直線状の外耳を有する深鉢である。147は外器面に横方向の刺突文を施しており、外耳上にも同様の施文を行なっている。178は無文である。

底部については10点を図示した。平底（121～123・149～151・180・181）、丸底気味の平底（182）、高台付き底部（179）がある。平底にはくびれ気味のもの（121）もある。また図示しなかったが尖底も１点出土している。

石器（第15図－６～８・10・11　図版19）

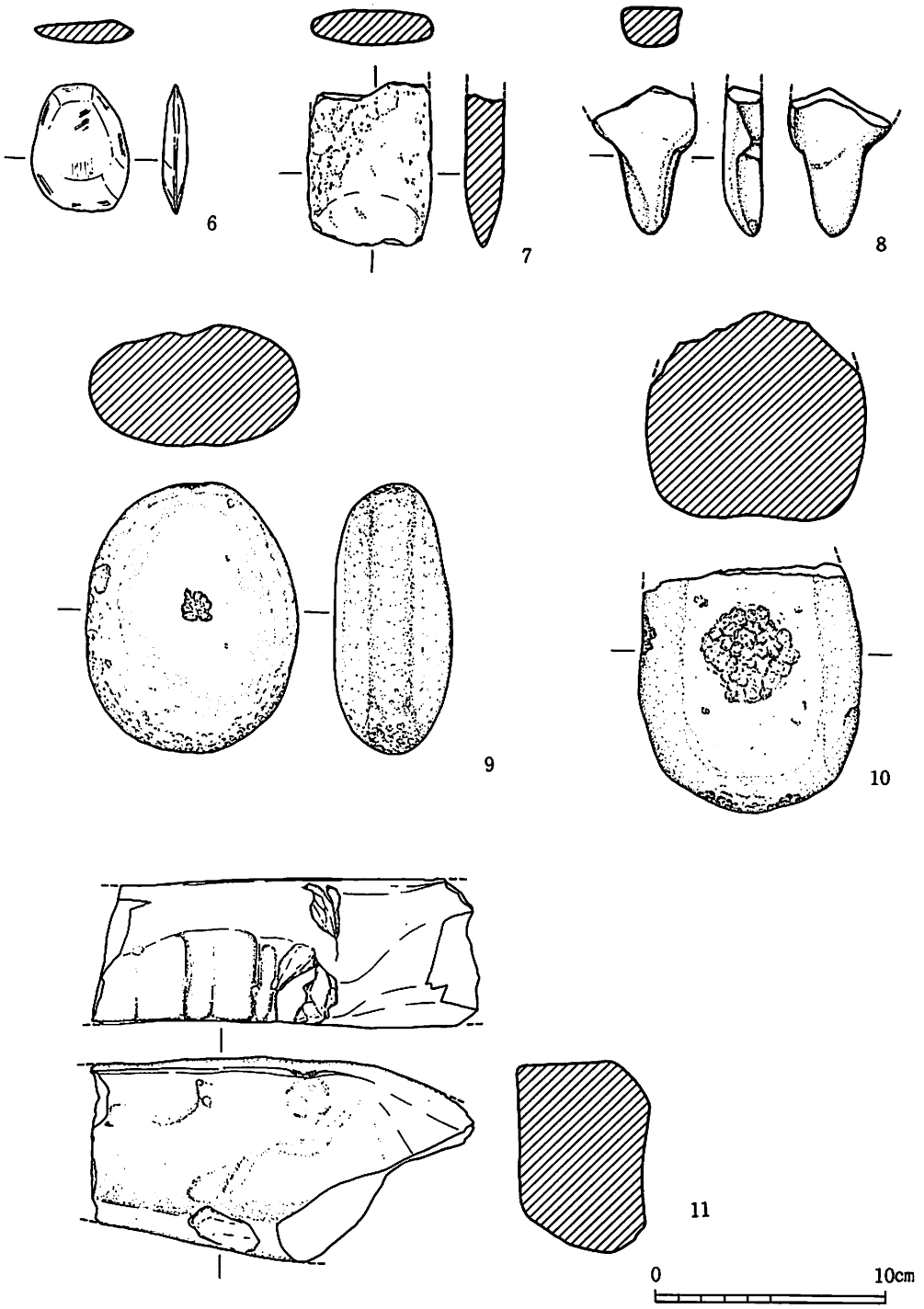
石斧・敲石・磨石・砥石・用途不明石器など計10点が出土した。

７は小形の両刃の磨製石斧で結晶片岩製である。基部を欠損している。両側縁はほぼ平行で、刃部はわずかに弧をなし、横断面は長楕円形を呈している。粗く成形し、啄彫を施した後で粗い磨研を施しているが、表面の刃部付近の磨研はやや丁寧である。刃部は鋭利さに欠けているが、それが使用によるものか石材のもろさによるものかは不明である。

10は砂岩製の磨石である。平面形は隅丸方形を呈していたと思われる。図の表面は磨耗によって平坦面をなし、さらに欠損の激しい裏面にも磨耗した面が一部残っている。また、欠損部を除く側面のほぼ全周にわたって敲打痕が認められ、表面の中央部付近にも敲打による丸く浅いくぼみがある。使用途中のどの段階かで、敲石として使用するようになったらしい。

11は左右を欠損した砂岩製の砥石で、転石を利用している。使用面は図の表裏面および上面である。表裏面には長辺方向および斜め方向の擦痕が残っており、特に擦痕の著しい裏面中央部付近には丸く浅いくぼみがみられる。表面は平均的に磨耗し、平坦になっている。上面は短辺方向に使用されており、使用面は平坦になっている。

６・８は用途不明石器である。６は結晶片岩製で完形品である。平面形は卵形、横断面は柳葉形に近い。全体に丁寧な磨研を施しており、縦横および斜め方向の擦痕がみられる。上下端部は比較的鋭く研ぎ出されており、一見して刃部を連想させるが、両側はやや鈍い。上下両端に刃をもつ極小形の利器と思われる。刃に相当する部分には、表裏面ともに横方向の擦痕が認められる。下端部にわずかな欠損がみられるが、使用によるものかどうかは不明である。重量は６ｇである。８は砂岩製である。細長く先細にのびた下部と幅の広い上部からなるもののようであるが、上端部を欠失しており旧形を推定することは困難である。上部と下部の境は角度をもつように明確につくり出されている。裏面が平坦であるのに対し、両側面と表面の境は丸みを帯びているため、横断面はカマボコ形に近い。欠損部分以外には全体に丁寧な磨研を施しており下部では磨研面の境がかすかな稜になって残っ



第15図　石器実測図(2)

305地点表採；9　E－19グリッドⅢ層；7
E－19グリッドⅣ層；6・8・10・11

ている。ただし、使用方法は不明である。

自然遺物（第11表）

Ⅰ～Ⅴ層の各層で出土した。各層とも獣骨・魚骨がほとんどで、中でもイノシシ・イヌの占める割合が高い。またⅡ層から刻線のあるカメの小骨片が1点出土しているが、用途は不明である。（吉永）

（3） 採集品

今回、土器片・石器・貝製品・自然遺物が、305・307・310地点で採集された。また、知名町中央公民館には、主として310地点から出土したと思われる石器が所蔵されている。以下にその所見を述べる。

1）調査区内採集遺物

土器（第16図　図版18）

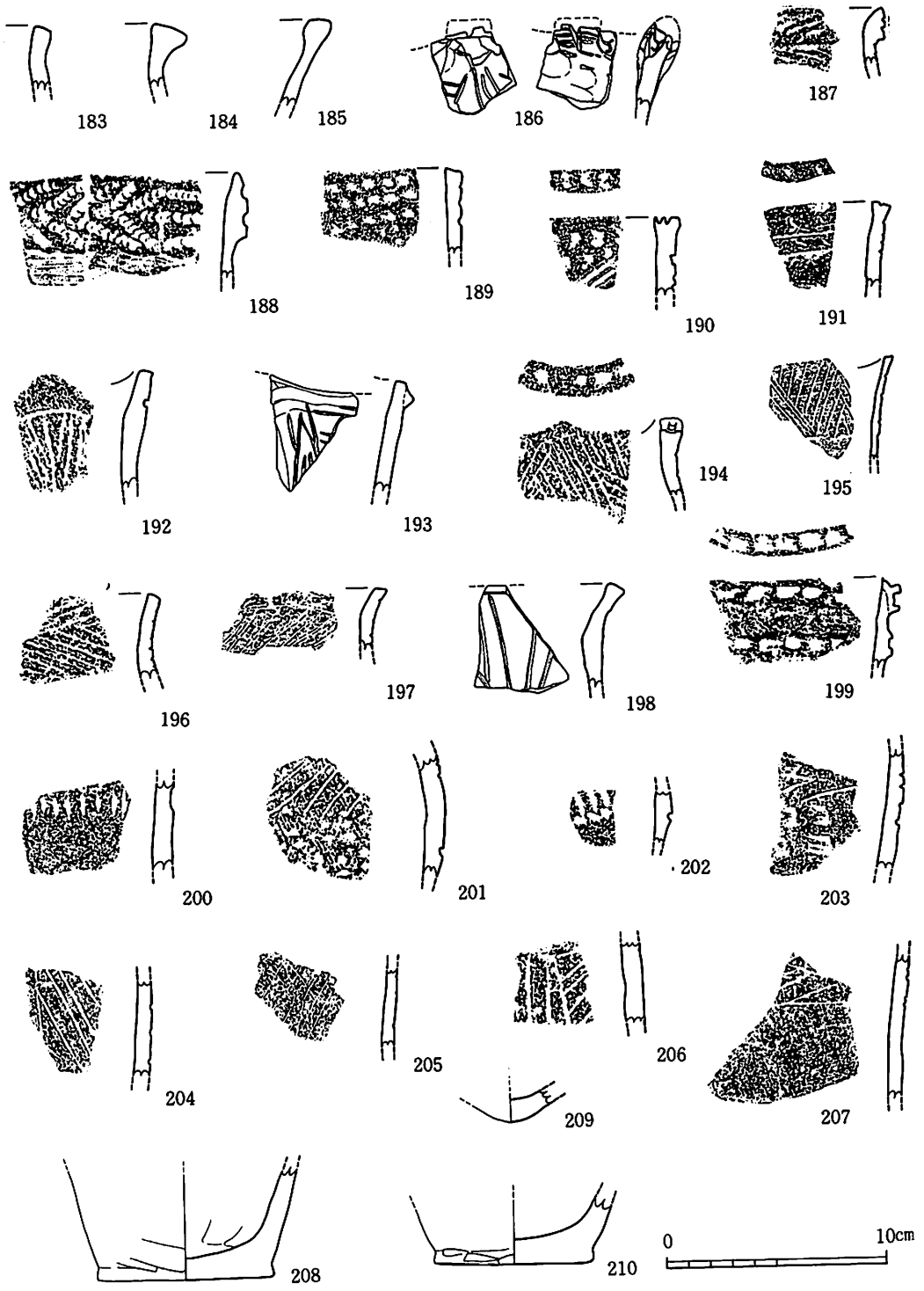
採集したもののうち特徴の明確なもの28点を図示した。そのうち前出の「土器の分類」に当てはまるものは以下の通りである。4類（188）、5類（199）、6類（189）、8類深鉢a（190・191）・胴部（201～203）、9類ア深鉢a（197）・b（192）・胴部（207）、9類イ深鉢a（196・191）・b（194・195）・胴部（205）、10類深鉢a（187）、11類深鉢a（183）・鉢a（185）、13類深鉢（184）の20点である。5・8・10類の深鉢には口唇部に文様を施すもの（190・191・194・199）がある。また195は施文部がわずかに肥厚している。

その他のものとして5点を図示した。186は突起付きの口縁部片である。口唇部をまたぐように幅約2cmの粘土紐を貼り付けて突起を形成している。突起の頂上には内外両器面にまたがる深い切り込みがあり、内器面には横方向の、外器面には縦ないし斜め方向の沈線が施されている。193は山形口縁部の破片である。口縁部には断面三角形の突帯が貼り付けられ、その下部に沈線が施されている。200・204・206は胴部片である。すべて小片のため文様構成は不明である。200には1条の刺突文が施されている。

以上の他に底部片も採集されており、3点を図示した。丸底（209）と平底（208・210）とがある。209は乳房状尖底気味の丸底である。208の内器面には指による縦方向のナデ調整が、外器面にはヘラ状工具による横方向のナデ調整がみられる。210の外器面にはヘラ状工具による横方向のナデ調整がみられる。

石器（第8図－1・5　第15図－9　図版19）

1は頁岩製の石斧である。刃部と基部および裏面の一部を欠失している。全体に丁寧な



第16図　採集品土器実測図

305地点；183・188・190・191・193・194・198・204
307地点；184・186・187・189・192・195～197・199～202・205～210
310地点；203

磨研が施されている。刃部は潰れて丸みを帯びており、欠損状況のままで使用され続けたものと思われる。5は砂岩製の磨石の4分の1の残欠品である。表面は滑沢を有し、中央に擂磨に用いたために生じたと思われる滑らかな浅いくぼみがある。裏面中央に打撃による浅いくぼみ、周縁部に帯状に敲打痕がみられることにより敲石としての兼用がうかがえる。9は結晶片岩製の自然石を利用した敲石である。裏面の上部を欠損している。表面および裏面の右端に磨研面が認められる。上下端に打撃痕、表面中央に打撃による残いくぼみが生じている。

貝製品（第9図－8　図版14）

8は段落のある1辺の一部と1つの孔だけが残っている残欠品である。腐蝕がひどく貝種は不明である。孔の付近にのみ丁寧な磨研面がみられるが、他の部分は表面が剝落しており不明である。孔は漏斗状で両面より穿孔されている。貫通孔径0.4cm、漏斗口径0.65cmである。

（野田・森）

2）知名町中央公民館所蔵石器（第17～19図　図版20・21）

知名町中央公民館に保管されていたものである。以下の知名町中央公民館所蔵石器観察表（第5～8表）にまとめた。なお、法量を（　）付きで示したものは欠損品である。

（福本・山下）

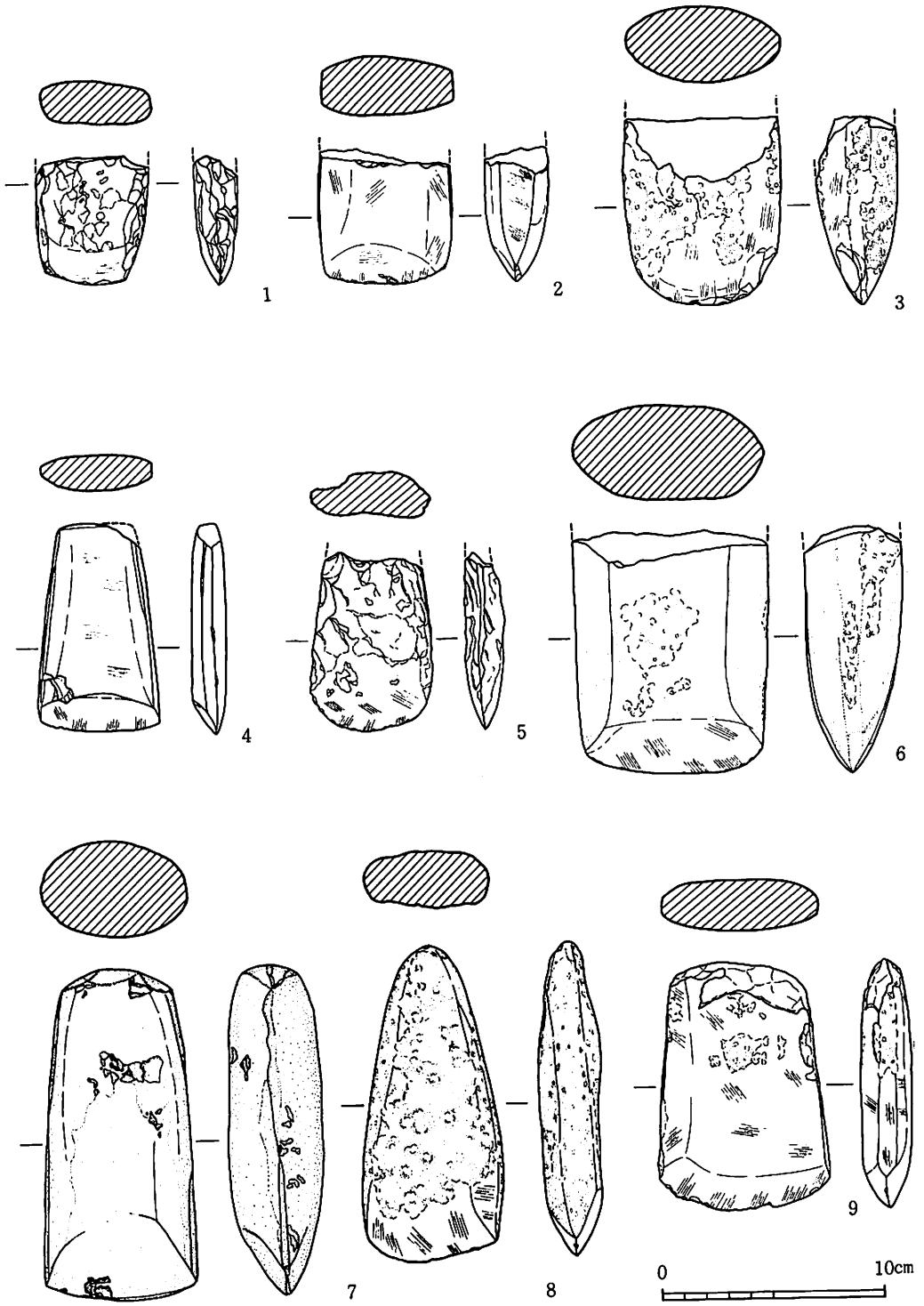
＊ブロックサンプリング

今回の調査では混貝土層の性格を把握するため、D－16aグリッドにおいてブロックサンプリングを行なった。D－16aグリッド西北隅に40×40cmの小グリッドを設定し、Ⅲb～Ⅴ層まで5cmずつ水平に層を切断してサンプリングを行なった。サンプルは上からA・B・C…Iとする。

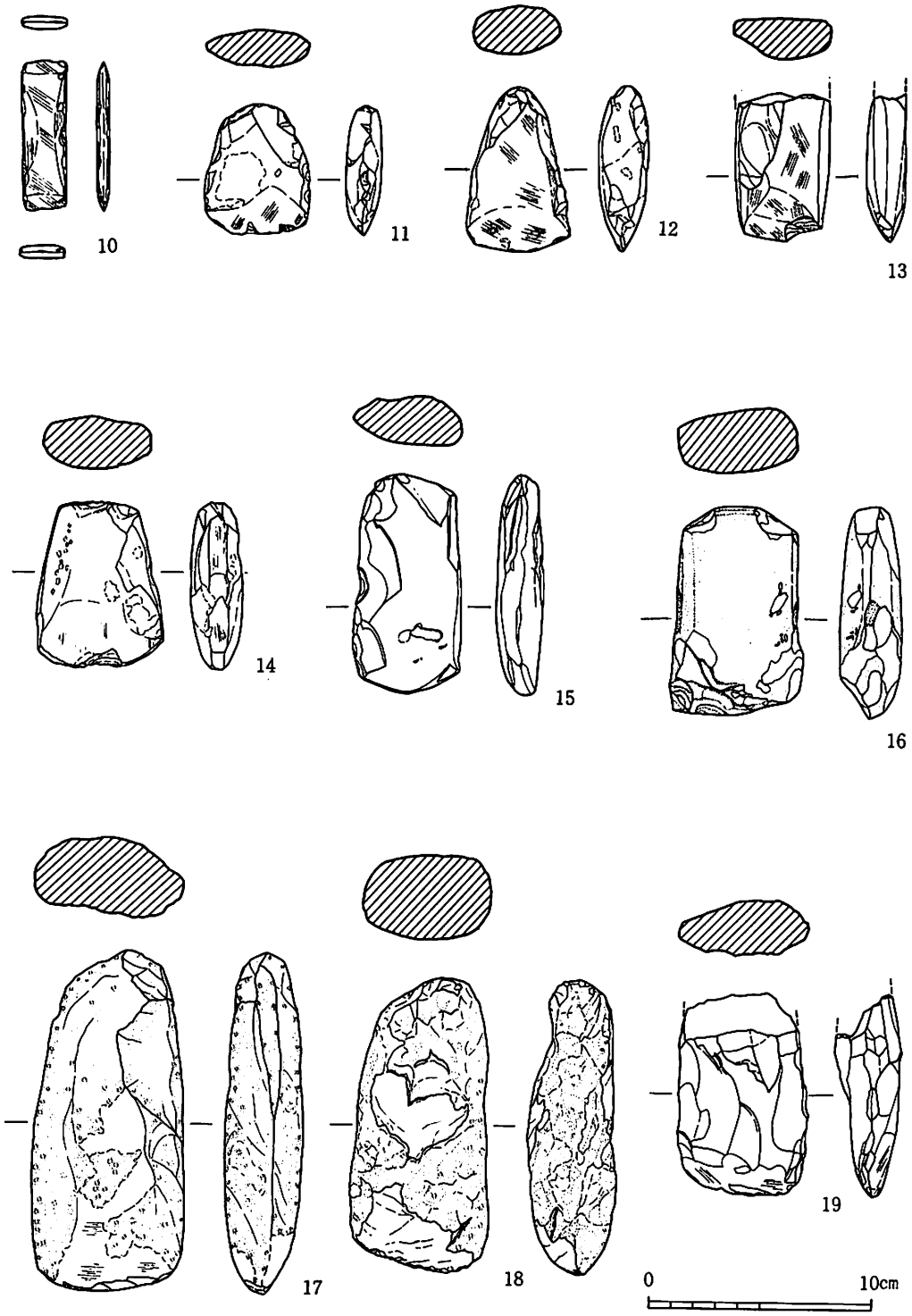
採取したサンプルはまず2mm、1.5mmのメッシュにかけて水洗した後、乾燥させた。その結果、貝・獣骨・魚骨・木炭・礫・土器片が検出された。このうち木炭は小片であり、樹種の同定はできなかった。貝・獣骨・魚骨については以下の通りである。

〈貝〉同定しえた貝は19科29種である。

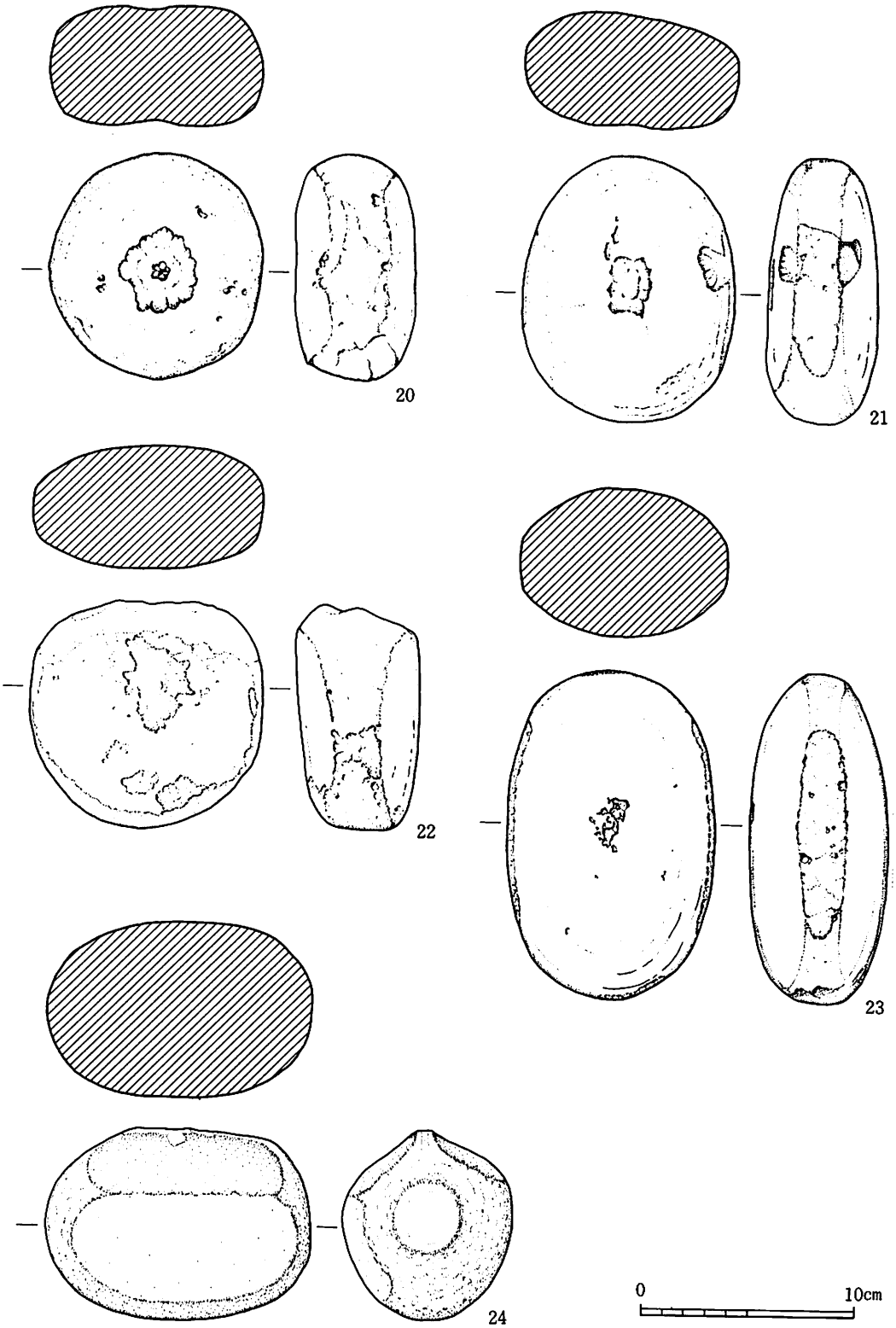
腹足綱		
オナジマイマイ科	不明	
キセルガイ科	不明	
トウガタガイ科	コマキモノガイ	*Leucotina dianae*



第17図　知名町中央公民館所蔵石器実測図(1)



第18図　知名町中央公民館所蔵石器実測図(2)



ただし24は2/3

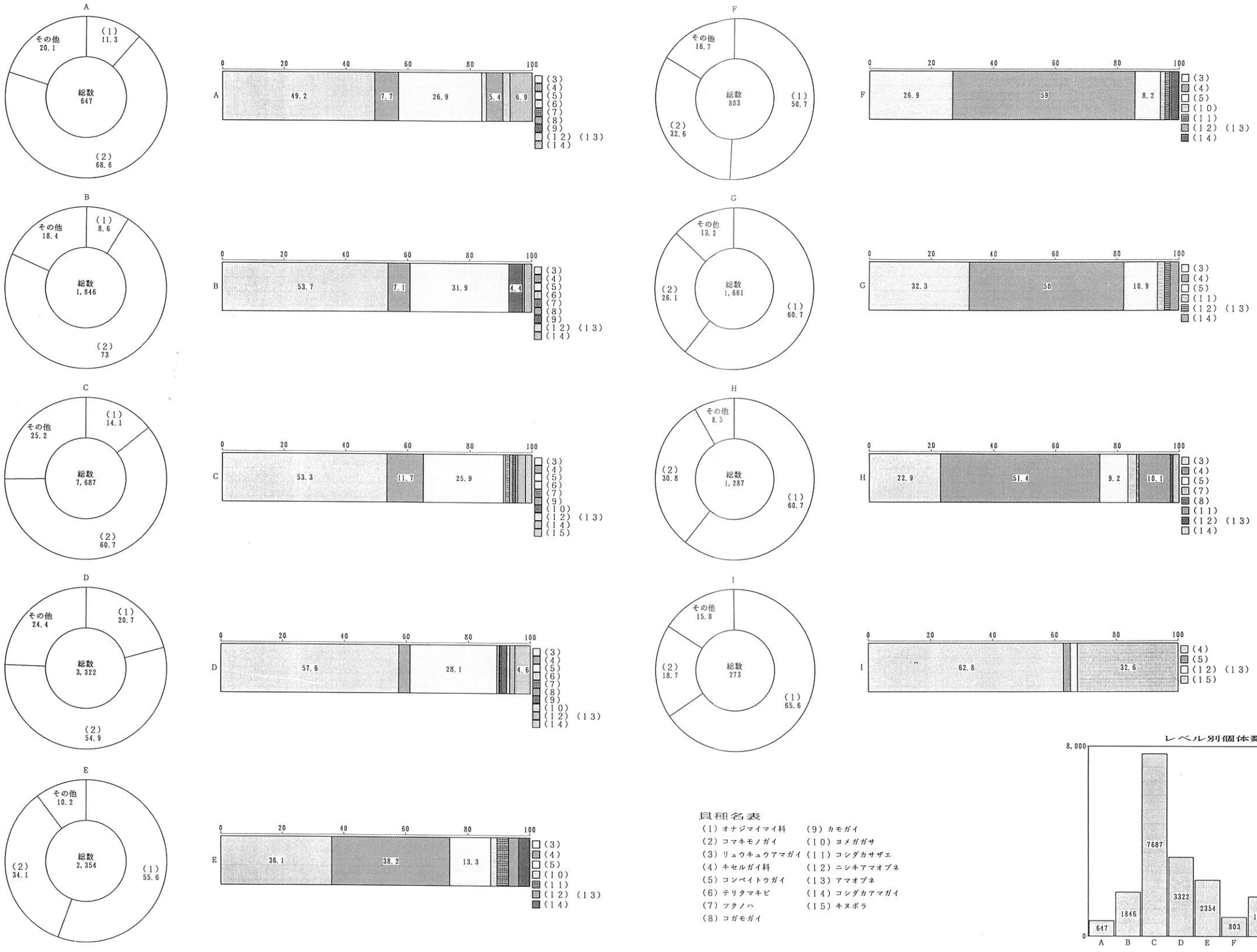
第19図　知名町中央公民館所蔵石器実測図(3)

ムシロガイ科	キヌボラ	*Reticunassa japonica*
タマキビ科	コンペイトウガイ	*Echininus cumingii luchuanus*
	テリタマキビ	*Littoraria coccinea*
ツタノハ科	ツタノハ	*Penepattella stellaeformis*
	ヨメガガサ	*Callana toreuma*
ユキノカサ科	コガモガイ	*Collisella(Conoidacmea) heroldi*
	カモガイ	*Collisella grata*
リュウテン科	コシダカサザエ	*Turbo(Marmarostoma) stenogyrus*
	リュウテン	*Turbo petholatus*
	チョウセンサザエ	*Turbo(Marmarostoma) argyrostomus*
アマオブネ科	ニシキアマオブネ	*Amphinerita polita*
	アマオブネ	*Theliostyra albicilla*
	リュウキュウアマガイ	*Amphinerita insculpta*
	コシダカアマガイ	*Ritena striata*
	イナヅマカノコ	*Vittina(Provittoida) paralella*
ニシキウズ科	不明	
イモガイ科	カバミナシ	*Rhizoconus vexillum*
タカラガイ科	ヤクシマダカラ	*Arabica arabica asiatica*
	ハナビラダカラ	*Monetaria annulus harmandiana*
アッキガイ科	ツノテツレイシ	*Mancinella hippocastanum*
	クチムラサキレイシダマシ	*Morula aspersa*
フジツガイ科	シオボラ	*Gutturnium muricinum*
オニコブシ科	不明	
フデガイ科	オオミノムシ	*Vexillum plicarium*
斧足綱		
シャコガイ科	不明	
バカガイ科	不明	

またD－16ａグリッドのレベルごとの出土量は次の通りである（第３表）。

○この統計の数値は、オナジマイマイ科のものは殻頂部のみを、また、他のものは完形品あるいはそれに近い個体のみを数えたもので、小片はこれに含めていない。
○円グラフではレベルごとの種別個体数の割合を示した。なお、帯グラフでは、円グラフ内のその他の部分を抜き出し、その中での種別個体数の割合を示した。なお、ニシキアマオブネとアマオブネはよく似ているため、ここでは両者を合わせた個体数を掲載した。
○分類するにあたり、西本豊弘氏に御指導いただき、合わせて下記の文献を参考にした。

白井祥平　『原色沖縄海中動物生態図鑑』　新星図書　1977
吉良哲明　『原色日本貝類図鑑』　保育社　1959
渡部忠重　『続原色日本貝類図鑑』　保育社　1961



貝種名表

(1) オナジマイマイ科
(2) コマキモノガイ
(3) リュウキュウアマガイ
(4) キセルガイ科
(5) コンペイトウガイ
(6) テリタマキビ
(7) ツタノハ
(8) コガモガイ
(9) カモガイ
(10) ヨメガガサ
(11) コシダカサザエ
(12) ニシキアマオブネ
(13) アマオブネ
(14) コシダカアマガイ
(15) キヌボラ

第3表　ブロックサンプリング統計表

D－16ａグリッドで出土した貝はオナジマイマイ科、コマキモノガイがいずれのレベルにおいても大多数を占めている。レベルA～Dまではコマキモノガイが、それより下位ではオナジマイマイ科が優勢である。レベルC出土のヤクシマダカラ、レベルD出土のツノテツレイシの中には焼けたものが存在する。また、腹足綱リュウテン科の貝は、外唇部の欠けたものが多いが、レベルC出土のものには、殻頂部を欠くものが多い。

〈獣骨・魚骨〉獣骨については、リュウキュウイノシシ・ネズミ・カメの骨を確認したが小片が多く、個体数の算定などはできなかった。焼骨もみられ、長管骨は細かく割られている。

魚骨については、レベルごとの個体数を以下の表に表した（第４表）。なお、個体数は最小個体数である。

魚名＼レベル	A	B	C	D	E	F	G	H	I	計
ブダイ科	2	6	12	11	4	1	4	2	3	45
ベラ科	1	1	4	2			2		1	11
フエフキダイ			2	3			1			6
ハタ			3							3
不明			1	6	8		4			19
カニ爪				1	1					2
計	3	7	22	23	13	1	11	2	4	86

第４表　魚骨個体数統計表

○個体数は、咽頭骨を１個体、上顎骨（左右１組）を１個体として数えた。カニの爪はハサミの部分２本を１個体として数えた。

○分類するにあたり、西本豊弘氏に御指導いただき、合わせて下記の文献を参考にした。

本部町教育委員会　『具志堅貝塚発掘調査報告』　1986

伊江村教育委員会　『伊江島ナガラ原西貝塚緊急発掘調査報告書』　1979

貝類の量が多いレベルC～Eの個体数が最も多く、全レベルでブダイ科が卓越している。また、焼けた骨が目立つが、その種類は不明である。

なお、各グリッドの自然遺物の出土状況は、後出の「出土自然遺物一覧表」にまとめているので参照されたい。　（友口・山下）

四、ま と め

今回、石原遺跡を調査するにあたり、2つのテーマを掲げた。1つは、貝塚に伴なう何らかの遺構を検出することであり、もう1つは、食物残滓である動植物遺存体を分析することによって、当時の人々の食生活を復元することである。

第1のテーマについては、今回は遺構と思われるものは何も発見できなかった。307地点での調査で遺構を検出できなかったのは、ここが石灰岩の小崖の肩にあたり、おそらく集落の縁辺部に相当するためであろう。石原の先史集落の中心地としては、地形や大量の石器の出土などから考えて、307地点の西側の道路を挟む地域が有力であるが、ここを発掘しなかったのは、いわゆる天地返しによって明赤褐色の地山のブロックが地表の所々に露出していたことによる。また、305地点でも遺構は発見できなかったが、それは層の堆積の状況や遺物の出土状況から考えて、当時この地点が窪地状の地形を呈しており、307地点からの流れ込みで包含層が形成されたためであろう。

第2のテーマに関しては、D－16aグリッドで、40×40cmの範囲で、ブロックサンプリングを行なった。今回の発掘調査で得られた自然遺物は、貝・獣骨・魚骨であり、307地点から集中して出土している。貝は29種におよぶが最も多量に出土したオナジマイマイ科・キセルガイ科の貝は、各層の上面に貼り付くようにして、密集して出土しており、他の貝の殻の外唇部や裏面に入り込んだ状態で発見されたものも多い。殻の破損もほとんどなく、小形のものが多い点などを考えあわせると、廃棄された食物残滓に集まった貝である可能性が高い。これらの貝を除けば、実際に食用に供されたと思われる貝はわずかである。岩礁性の小形ないし中形の貝が大半で、体長10cmを超える大形の貝は、全くみられなかった。

貝類に比べ、獣骨・魚骨の出土量は豊富である。獣骨では、リュウキュウイノシシ[注1]・カメ・クジラ・イヌ・鳥類などが出土した。このうち、最も出土量が多いのはリュウキュウイノシシであり、カメがそれに次ぐ。両者ともに全グリッドの全層にわたってほぼまんべんなく出土している。焼けた骨も存在する。長管骨はことごとく割れており、切断痕と思われる切口を有する骨もある。魚骨では、ブダイ・ヘダイ・ベラ・ハリセンボンなどが出土した。判別のついたもので最も量の多かったのはブダイ科の魚で、D－16aグリッドのブロックサンプリング中からは45個体が出土している。

動物性の食料に関していえば、石原遺跡で当時生活していた人々は、貝類よりも、リュウキュウイノシシやブダイなどを中心とする動物・魚類を、より多く食べていたことが推定される。ちなみにイギリス中石器時代の貝塚遺跡の分析によると、4家族20人の1日の食料としては、イノシシでは½頭、体長3cmのタマキガイでは7万個、カサガイでは1万個が必要であると想定されている。[註2]

植物性食料については、今回は何も検出できなかった。沖永良部島の現在の植物としては、亜熱帯性のソテツ・ガジュマルなどの群生がみられるが、奄美大島や徳之島でみられるようなシイの大群落は見られない。基盤が隆起珊瑚礁であり、したがってPH値が高いのが原因という意見と、シイの大群落としては南限に近いためという意見がある。ちなみに沖縄本島も北部にはシイの大群落があるという。もし、後者の理由だったとすれば、その時々の気象条件での反応は極めて鋭敏であったはずであり、人文もそれに左右されかねなかったであろう。そこで、遺跡形成時の植物相の状況を探るべく、E－19グリッドでII～V層の土を採取して、花粉分析を行なったが、はかばかしい結果は得られなかった。

今回の調査では、自然遺物の他、多くの土器や石器・貝製品・骨製品が出土している。特に、豊富な土器群と種々の貝製品が注目される。

土器は、器形・文様・口縁部の形態などにより、今回1～14類に分類した。これを従来いわれている土器型式と照合すればほぼ以下のようになる。即ち2類－市来式に類似、3類－伊波式、4類－面縄東洞式、5類－伊波式・神野D・E式、6類－大山式、7～9類－嘉徳I・II式、10類－面縄西洞式、11類－喜念I式、13類－宇宿上層式、14類－カヤウチバンタ式。1類はいわゆる神野B式[註3]に文様構成が類似しているが、口縁部の形態、器壁の薄さなどが異なる。11類は口縁の肥厚しない無文の土器で神野貝塚[註4]・手広遺跡[註5]などで有文の土器に伴なうことが知られている。器種は深鉢が主であるが、8～11・14類は鉢、11～14類は壺をもつ。ただし、12類は壺形土器のみの出土である。これらの土器は大別すれば、1）南九州系の土器、2）奄美系の土器、3）沖縄系の土器のグループとなる。このうち2類とした南九州系の土器は1点のみの出土であり、胎土などからみて現地で製作された可能性が高い。残りの2つのグループの土器群の中で量的に多いのは、2）の奄美系の土器である。とりわけ4類面縄東洞式土器、7～9類嘉徳I・II式が多い。4類は平口縁のみ、7類には平口縁と山形口縁、8・9類には平口縁と山形口縁・突起付き口縁があるが、いずれも細片であるため、器種のセット関係をつかむことはできなかった。

沖縄系の土器のグループとしては3類伊波式、5類伊波式・神野D・E式、6類大山式が

多い。5類には平口縁と山形口縁のものがあるが、3類は山形口縁のみ、6類は平口縁のみである。細片のため器種のセット関係は不明のままである。

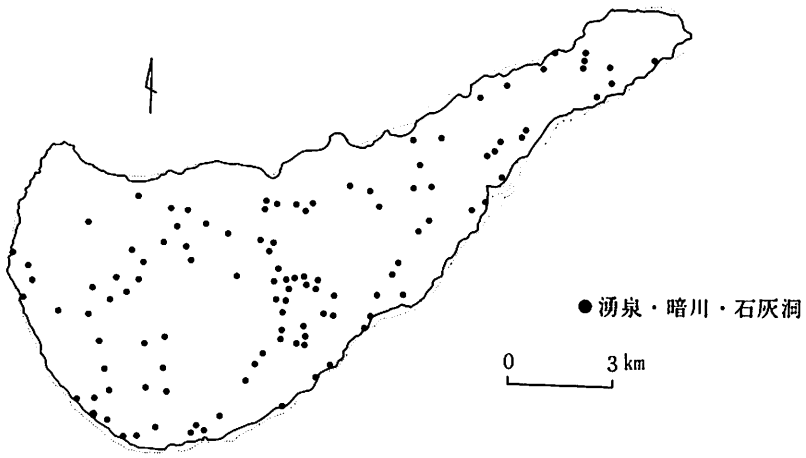
貝製品としては、貝製垂飾品・貝輪・貝小玉などが出土している。貝製垂飾品は7点で、龍形貝玉の系譜を引くと思われるものと鮫歯製垂飾品を模したと思われるものとに分類することができる。[註6]

前者に分類した貝製品のうち、注目されるのは、シャコガイ製の大形で重厚な貝製品（第9図9）である。全体が丁寧に磨研されており、縁は階段状に刻み込まれている。形状は熱田原貝塚[註7]や地荒原貝塚[註8]出土の貝製品に似ているが、刻みの入れ方はそれほど厳格ではない。

後者は、3点ともシャコガイ製で、三角形ないし五角形を呈し、大形のものと小形のものとに分けられる。いずれも、奄美圏より沖縄圏で多く出土しており[註9]、土器が奄美系のものを主としていた点と対称的である。

石原遺跡は、沖永良部島東海岸に形成された段丘上に立地しており、九州以北の時代呼称でいえば、縄文時代後期後半期を中心とする遺跡である。ほぼ同時期の遺跡としては神野貝塚が挙げられるが、神野貝塚は、太平洋に面する臨海砂丘上に占地しており、立地の点では大きく異なっている。逆に、時期の異なる遺跡の立地をみていくと、沖永良部島では、沖縄地方でみられるような明確な立地の違いがないようである。

沖永良部島は割合に低平な島である。奄美の遺跡の後背地の多くが台地状の地形であることからすると、他の峻険な山々をもつ島に比べて少なくともこの点では沖永良部島は暮らしやすかったはずである。また、珊瑚礁の利用を生業の根幹の1つとしたことは奄美方面で顕著であるが、沖永良部島南部の海岸に発達した幅広い裾礁に遺跡が集中している形跡はない。つまり、この島の遺跡の立地は、他の島々と異なる原因に左右されていると考えた方がよさそうである。第20図沖永良部島における湧泉・暗川・石灰洞の分布[註10]を3頁第1図沖永良部島遺跡分布図と対照してみると、図示された遺跡のうち、暗川などと関係なしに立地しているのは、No.10（皆川遺跡）・No.20（アンギム遺跡）・No.21（田皆伊美畑遺跡）の3つだけである。しかもNo.10・21は石斧数点が採集されただけの地点であり、No.20はカムィヤキ系の土器などの点在する地点である。[註11]他はすべて暗川などに依拠しているとみなしてよいであろう。表床水の少ないこの島は水道の敷設される1958年まで飲料水・生活用水を暗川などに求めており[註12]、それは先史時代以来であったことになる。まだ若干の未確定要素が残るが南島の一般的な先史遺跡の立地条件を考える際には、この島のデータは除外し



第20図　沖永良部島における湧泉・暗川・石灰洞の分布

た方がよいのであろうし、この先の課題の１つとして、水への対応の仕方が表面化するのは遺跡立地にとどまるのかどうか、非常に興味深い点である。　（友口）

註１　西本豊弘氏によれば、リュウキュウイノシシとしては大形で、本土から持ち込まれた可能性があるということである。

註２　Roger. M. Jacobi *"The early Holocene settlement of Wales"* J.A.Taylor *ed.* Culture and Environment in Prehistric Wales. B.A.R British Series 76 1980, London.

註３　沖縄国際大学文学部考古学研究室「沖永良部島神野貝塚発掘調査概報」『沖国大考古』７～９号　1985－1988

註４　註３に同じ

註５　熊本大学文学部考古学研究室『手広遺跡』（概報）　1986

註６　白木原和美「沖永良部島石原遺跡の骨・貝製品」『文学部論叢』第25号　1988

註７　高宮広衛、C.W.ミーヤン「知念村熱田原貝塚発掘概況」『文化財要覧』（1958年度版）琉球政府文化保護委員会　1958

註８　多和田真淳『地荒原貝塚発掘報告書』　1962

註９　三島格「九州および南島出土の鮫歯製垂飾について」『国分直一博士古稀記念論集』1980

註10　玉野井芳朗「沖永良部島の水利用」『沖永良部島調査報告書』　1981
鈴木公「沖永良部島の集落変容の地理学的研究」『沖永良部島調査報告書』　1981
以上の文献より作成

註11　知名町教育委員会『知名町埋蔵文化財分布調査概報』　1986

註12　赤地信他『知名町誌』　1982

図-番号	石器名	石材	法量 (cm) (g) 長さ	幅	厚さ	重量	特徴
17－1	磨製 両刃石斧	ホルンフェルス （泥岩起源）	(5.8)	4.9	2.0	(85.0)	粗製の小形品である。基部が折損している。平面形は矩形、横断面は隅丸長方形を呈する。両刃で鋭く研ぎ出されており、刃縁はゆるい弧をなす。全体に啄彫を加えた後に磨研が施され、刃部は特に丁寧である。刃部には垂直方向からの力による刃こぼれが認められる。
17－2	磨製 両刃石斧	輝緑凝灰岩	(6.0)	6.0	2.9	(175.0)	厚手の両刃石斧である。基部が折損している。平面形は矩形、横断面は長楕円の両端を切った形を呈する。刃縁はゆるい弧をなす。全体に入念な磨研が施されている。刃部には垂直方向からの力による刃こぼれが認められる。
17－3	磨製 両刃石斧	緑色片岩	(8.4)	7.1	(3.7)	(335.0)	厚手の大形の石斧である。基部が折損している。平面形はかんなの刃のような形、横断面は長楕円形を呈する。両刃で刃縁は深い弧をなし、半円形に近い。全体を啄彫により整形した後、磨研が施され、特に刃部付近は丁寧である。刃部には刃こぼれおよび縦ないし斜め方向の擦痕が認められる。
17－4	磨製 片刃石斧	橄欖岩	9.3	5.4	1.6	(145.0)	長台形を呈する平板な片刃石斧である。基部がわずかに破損しており、横断面は著しく横長な楕円形を呈する。刃部は鋭利に研ぎ出され、刃縁はわずかに弧をなす。全体に丁寧な磨研が施され、滑沢を有している。刃部には小さな刃こぼれや、また図の裏面には縦方向の線条痕が無数に認められる。
17－5	磨製 両刃石斧	結晶片岩	(8.0)	5.5	1.8	(117.5)	粗製の小形品である。基部が折損している。平面形は矩形に近く、横断面はいびつな台形状を呈する。両刃で刃縁は深い弧をなす。刃部周辺には入念な磨研が施されるが、それ以外には成形時の打裂痕をとどめる。図の裏面には、刃部に小さな刃こぼれと刃に対して垂直方向の強い擦痕が認められる。
17－6	磨製 両刃石斧	橄欖岩	(10.8)	(8.8)	(4.4)	(720.0)	厚手の大形品である。基部が破損しており、残存部で推定すると平面形は矩形、横断面は六角形に近い形を呈する。両刃で刃縁はわずかに弧をなす。全体を啄彫により整形した後、磨研が施され、特に刃部は入念である。刃部には全体にわたる打撃痕が認められる。基部破損後の再利用のためか、割れ口を粗く整形している。

第5表　知名町中央公民館所蔵石器観察表(1)

図-番号	石器名	石材	法量 (cm) (g) 長さ	幅	厚さ	重量	特徴
17－7	磨製 両刃石斧	橄欖岩	14.7	6.7	4.3	717.5	完形の大形品である。平面形は長方形、横断面は楕円形を呈する。両刃であるが、研ぎ出しの角度は表裏一様ではない。刃縁はわずかに弧をなす。全体を啄彫により整形した後、丁寧な磨研を施す。頭頂部の仕上げはやや粗い。刃部の磨研は特に丁寧であるが、磨滅により鋭さを欠く。装着のためか、側面上部を浅く磨りくぼめている。
17－8	磨製 両刃石斧	橄欖岩	14.1	6.4	2.9	392.5	完形品である。平面形は二等辺三角形、横断面は隅丸長方形を呈する。両刃で刃縁はゆるい弧をなす。全体を啄彫により整形した後、磨研を施すが、刃部以外には啄彫痕をとどめる。頭頂部の仕上げは粗い。刃部には表裏ともに縦方向の擦痕が認められ、垂直方向からの加圧による打撃痕が認められる。
17－9	磨製 両刃石斧	橄欖岩	11.0	7.6	2.3	(350.0)	ほぼ完形の石斧である。平面形は矩形、横断面は長楕円の両端を切った形を呈する。両刃で刃縁はゆるい弧をなす。基部以外には入念な磨研が施されて光沢を有するが、一部に啄彫痕や打裂痕をとどめている。両側面の上部はかなり荒れているが装着のためかどうかは不明である。刃こぼれ及び擦痕がほぼ全面に認められる。
18－10	鑿形石器	粘板岩	6.7	2.0	0.6	15.0	完形品。平面形は短冊形、横断面は扁平で中央部がわずかに膨らんだ形を呈する。両端部に鋭利に研ぎ出された両刃の刃部を持つが、刃の様子に一種の慣れがあり、研ぎ直しながら使用され続けたことがうかがえる。全体に丁寧な磨研が施され、器体の中程が意識的に磨りくぼめられているのが目立つ。器面には手慣れが認められ、くぼんだ部分で特に強い。刃部には垂直方向からの加圧による使用痕が認められ、その様相等は上下の刃部とも酷似している。
18－11	磨製 片刃石斧	ホルンフェルス （泥岩起源）	5.8	4.7	1.6	67.0	完形の小形品で粗製である。平面形は隅丸の三角形、横断面は長楕円形を呈する。両刃に近い片刃で、刃縁はわずかに弧をなす。刃部周辺には入念な磨研が施されている。刃部には刃こぼれが認められる。
18－12	磨製 両刃石斧	輝緑凝灰岩	7.4	4.7	2.3	108.0	完形の小形品である。平面形は隅丸の二等辺三角形、横断面は楕円形を呈する。両刃で刃縁はゆるい弧をなす。全体に磨研を施しているが、頭頂部および側面の仕上げは粗く、磨研は行きとどいていない。装着のための仕様と思われる。刃部の数ヶ所に刃こぼれ、また全面に擦痕が認められる。

第6表　知名町中央公民館所蔵石器観察表(2)

図-番号	石器名	石材	法量(cm)(g) 長さ	幅	厚さ	重量	特徴
18－13	磨製 片刃石斧	結晶片岩	(6.6)	4.2	1.8	(92.5)	基部が欠損した片刃石斧である。残存部で推定すると平面形は矩形、横断面は隅丸長方形を呈する。刃部はゆるい孤をなしていたと思われるが一部が破損している。全体に丁寧な磨研を施すが、裏面の一部に啄彫痕をとどめる。刃部には数ヶ所に刃こぼれが認められ、全体に縦あるいは斜め方向の擦痕が観察される。
18－14	磨製石斧	ホルンフェルス （泥岩起源）	7.5	5.6	2.4	162.5	完形の小形品である。平面形は台形、横断面は中央部に膨らみをもつ隅丸長方形を呈する。全面に磨研を施すが、裏面・側面の一部に啄彫痕をとどめる。刃縁はゆるい弧をなしていたと思われるが刃部中央部が欠損している。刃端は磨耗が著しく、幅6㎜のベルト状を呈する。刃部破損後転用されたもの(註)と思われる。両側面中央部には、縄掛け痕と思われるくぼみが認められる。
18－15	磨製 片刃石斧	結晶片岩 （黒色片岩）	9.7	4.9	2.1	167.5	完形品である。平面形は矩形、横断面はいびつな楕円形を呈している。片刃で刃縁はゆるい弧をなす。全体に磨研を施しているが、極めて粗い。刃部は異常に鈍く、刃縁に直交する方向に、こすり続けたように磨滅している。側面の一部には、縄掛け痕と思われるくぼみが認められる。
18－16	磨製石斧	橄欖岩	(9.2)	5.8	2.8	(247.5)	刃部が欠損しており、刃部の形状は不明である。全体に入念な磨研を施している。両側面中央部に目の粗い磨研を加えて磨りくぼめてあり、縄掛けの痕と思われる。頭頂部の両端は打ち欠いてあるが、装着のための仕様であろう。
18－17	磨製 両刃石斧	ホルンフェルス （泥岩起源）	15.2	6.8	3.4	570.0	完形の大形品である。平面形は隅丸の長方形に近く、横断面はいびつな長楕円形を呈する。両刃で刃縁はわずかに弧をなす。全体を啄彫により整形した後、磨研を施しているが刃部以外には啄彫痕をとどめる。頭頂部の仕上げは粗く、装着のためか両側面にくぼみが認められる。刃部には強打による打撃痕が認められる。全体に慣れが生じており、長期間使用されたものと思われる。
18－18	石斧未製品	輝緑凝灰岩	13.0	6.3	3.9	520.0	自然礫を粗割りする段階で廃棄されたものと思われる。刃部もまだ明確につくり出されるに至っていない。

註）国分直一『南島先史時代の研究』1972 において、「皮なめし」用石器として掲げられているものに類似している。

第7表　知名町中央公民館所蔵石器観察表(3)

図-番号	石器名	石材	法量(cm)(g) 長さ	幅	厚さ	重量	特徴
18－19	磨製 片刃石斧	結晶片岩 （緑色片岩）	(9.0)	5.8	(3.1)	(200.0)	粗製の片刃石斧である。基部が破損している。平面形は矩形、横断面はいびつな長楕円形を呈する。刃縁はわずかに弧をなす。刃部には入念な磨研が施されるが、それ以外は成形時の打裂痕をとどめ、打ち放しのままである。刃部には数ヶ所に刃こぼれ、擦痕が認められる。
19－20	敲石	ホルンフェルス （凝灰岩起源）	10.7	9.9	5.7	915.0	平面形は円形、横断面は隅丸長方形を呈する。表裏両面の中央に敲打による円形のくぼみを有し、周縁には敲打痕が全周にわたって幅広く認められる。敲打痕は平面にもおよんでおり、敲打痕のみられない部分には自然面が残っている。
19－21	敲石	ホルンフェルス （泥岩起源）	12.5	10.0	5.2	935.0	平面形は卵形、横断面は長楕円形を呈する扁平な石器である。表面中央には敲打による浅いくぼみを有し、裏面中央にはわずかな敲打痕を有する。図の両側縁と上下端にも敲打痕がみられるが、全周にはわたっていない。敲打痕のみられない部分には非常に滑らかな自然面が残っており、転石を利用したものと考えられる。
19－22	敲石	ホルンフェルス （砂岩起源）	10.5	10.8	5.8	1060.0	平面形は円形に近く、横断面は長楕円形を呈する。使用途中で図の上部が欠損した後も敲石として使用されている。表裏両面には自然面が残っており、また、破損前にできたと思われる敲打によるごく浅いくぼみがみられる。周縁には全周にわたる敲打痕がみられる。全体に手慣れが生じている。
19－23	敲石	ホルンフェルス （砂岩起源）	15.3	9.8	6.7	1567.0	平面形は長楕円形、横断面は楕円形を呈する厚みのある石器である。表裏両面の中央にわずかな敲打痕を有する。図の両側縁と上下端にも敲打痕がみられるが、全周にはわたっていない。非常に滑らかな面が残っており、転石を利用したものと考えられる。
19－24	クガニ石	ホルンフェルス （砂岩起源）	13.3	18.2	11.9	4270.0	いわゆるクガニ石である。平面形・横断面ともに楕円形を呈する。図の表面および側面の中央に自然面を残す他は、全面に啄彫痕がみられる。図上部の両側を啄彫によってくぼめ、凸帯を形成している。図下部は使用部と考えられ、やや磨耗している。

第8表　知名町中央公民館所蔵石器観察表(4)

項目 グリッド	層序	獣　　骨	魚　　骨	貝	その他、備考
D－16a	Ⅲ－a	リュウキュウイノシシ（Hum L, Cal R, Ve, Mc or Mf, rib fr, M or P, 基節骨）	ブダイ（dent R2, P-max R2, L2) タイ（P-max L1）	マイマイ、チョウセンサザエ、ギンダカハマガイ、コシダカハマガイ、タカラガイ、シラクモガイ、イボアナゴ、オキニシ、オオシャコガイ、ニッコウガイ科（アナアキウズガイ？）	カニ（爪）
	Ⅲ－b	リュウキュウイノシシ（Rad L, Hum R, rib, Ve, Ul L・R, 側頭骨 L, mand 枝） イヌ、カメ（甲）	ブダイ（dent L・R, P-max L・R, 咽頭歯上・下） イロブダイ（下咽頭歯） ヨコシマクロダイ（dent R） タイ科（Ve）、エイ（鱗板） サメ（Ve）	チョウセンサザエ、タカラガイ、スイジガイ、アサリ？	カニ（爪）
	Ⅲc－1	リュウキュウイノシシ（mand L, max L, Cal R2, 頬骨 L, rib） イヌ？、トリ？		タカラガイ片	カニ（爪）
	Ⅲc－2	リュウキュウイノシシ（Fe R 下, Hum R 中, rib）　カメ		スイジガイ片	カニ（爪）
	Ⅲc－3	リュウキュウイノシシ（Hum R, Tib R 上下, rib, max L (P), mand R, Rad R 上, Rad L 下, Tib R 上下, Tib L 中, Cal R, Ve, 基節骨, Fe R 中, Fe L 下, Pel R, Mc or Mf） イヌ（Tib R 中） カメ（四肢）	ブダイ（P-max R, dent L） タイ（Ve）、サメ（Ve）	マイマイ、チョウセンサザエ、ヤコウガイ？（フタ）、イモガイ、タカラガイ、シラクモガイ、ミミガイ？、シャコガイ	カニ（爪）
	Ⅳ	リュウキュウイノシシ（胸 Ve, rib, mand L）	不明破片	チョウセンサザエ	
	Ⅲc－5	不明骨片	不明骨片		
	Ⅴ	リュウキュウイノシシ（Hum L 中, Fe 中, fr, Pel R, rib fr）	ブダイ（dent L1）		カニ（爪）
	Ⅵ	リュウキュウイノシシ片		スイジガイ片	
D－16d	Ⅲ b	リュウキュウイノシシ（rib, 頬骨 L・R, Mc or Mf, Pol L 上, Tib R 中 fr, Tib L 下, Cal L, Ve, mand R 下, Rad R 上, L 中, mand R） カメ（甲）、クジラ片	ブダイ（P-max L, dent R）	マイマイ、チョウセンサザエ、ユキノカサガイ科、ニシキウズガイ科、イモガイ、タカラガイ、シラクモガイ、オキニシ、フネガイ科	カニ（爪）
	Ⅲc－1	リュウキュウイノシシ（Mc or Mf, Hum R 下, Cal R, Pol R, Fe R 下, Ve, mand L・R, Rad fr		マイマイ、チョウセンサザエ、タカラガイ片、シャコガイ、巻貝片	カニ（爪）

第 9 表　出土自然遺物一覧表(1)

グリッド＼項目	層序	獣骨	魚骨	貝	その他、備考
D－16d	Ⅲc－2	リュウキュウイノシシ (Cal R, 末節, Mc or Mf) イヌ (Ul R)	ブダイ (P-max R) 不明破片	マイマイ片、チョウセンサザエ	ウニ (棘)
	Ⅲc－3	リュウキュウイノシシ (Tib L 上・下, Ve, Mc or Mf, Cal L, Ast R, Rad R 上, rib, Ul R 上)	ブダイ？ (Ve?)	オキニシ	カニ (爪)
	Ⅳ	リュウキュウイノシシ (Ul R, Rad R 上, Hum R 中, mand R (M_2), 側頭骨 L, 基節骨, rib, 胸 Ve) トリ、カメ (甲 fr, 四肢 fr)	ブダイ (dent fr R, 下咽頭歯)	マイマイ、チョウセンサザエ、シャコガイ	カニ (爪)
	Ⅲc－5	リュウキュウイノシシ (Rad L 上～中, Mc or Mf) カメ (指骨)	不明破片	マイマイ、チョウセンサザエ 不明破片	カニ (爪)
	Ⅴ	リュウキュウイノシシ (Hum R 上, Ul R, Tib L・R 下, 基節骨, Mc or Mf, rib fr, Fe 中 fr) カメ (甲)		チョウサンサザエ、シラクモガイ、ヒメジャコ、不明破片	
	Ⅵ	リュウキュウイノシシ (Tib R 上・下)	ブダイ (後頭部片)	マイマイ、チョウセンサザエ、ヤコウガイ(フタ)、ヒメジャコ	
	Ⅶ	リュウキュウイノシシ (Tib L 上・中, mand L)		マイマイ、チョウセンサザエ、ヤコウガイ(フタ)、タカラガイ、シラクモガイ、オキニシ、オオシャコガイ、不明貝片	
E－16a	Ⅲ	リュウキュウイノシシ (Hum R 中・下, Pel R, Tib L, rib, Ve, 基節骨, Cal) イヌ (mand L (P_{34}, M_1), rib) カメ (四肢) ネズミ (Fe, Tib fr)		マイマイ、サンショウガイ類 (ワニガワサンショウガイ？) ニシキウズガイ、ギンダカハマガイ、イモガイ片、タカラガイ片、シラクモガイ、オニツノガイ、巻貝、オオシャコガイ、フネガイ科 (カリガネエガイ？)、二枚貝片	カニ (爪) サンゴ
	Ⅳ	リュウキュウイノシシ (Hum R 上・L 中, Fe 上 fr, 基節骨, rib, Ul R, Rad R, Cal 右, Ve) カメ (甲)、ネズミ (Tib L) イヌ (Rad)		チョウセンサザエ	
	Ⅴ	リュウキュウイノシシ (rib fr) トリ			
	Ⅵ	リュウキュウイノシシ (Pel R, 基節骨)			
E－16d	Ⅲ	リュウキュウイノシシ (Tib R 下, Cal, M L fr)	不明破片		カニ (爪)
	Ⅳ	リュウキュウイノシシ (Fe 下関節部, Ve, Ast R, Hum R 中・L 中, mand R?, Mc or Mf) クジラ、不明破片		チョウセンサザエ、ニシキウズガイ科 (アナアキウスガイ？)、イモガイ、タカラガイ、シラクモガイ、ムラサキイガレイシガイ、スイジガイ、不明巻貝、シャコガイ、オオシャコガイ、チョウセンハマグリ (フタ？)	ヒト (P？) カニ (爪)

第10表　出土自然遺物一覧表(2)

グリッド＼項目	層序	獣骨	魚骨	貝	その他、備考
E－16d	V	リュウキュウイノシシ(四肢)	不明 rib fr	チョウセンサザエ	
	IIIb′	リュウキュウイノシシ(rib, Ul LR, Tib R中・R上～中・L下, Mc or Mf) カメ、トリ	ブダイ(後頭部) 不明棘	スイジガイ	
	VI	リュウキュウイノシシ (Rad 中, Mc or Mf) カメ、トリ(Ul)		ヤコウガイ、フタ片	フン石？
E－19	III(上面)	リュウキュウイノシシ (Hum R下) カメ(甲)	不明 Ve fr		
	III	リュウキュウイノシシ(rib)			
	III(下面)	リュウキュウイノシシ (rib R下, Mc or Mf, 基節骨, 中節骨, 末節骨, Rad R下, 下 M_3R) イヌ(Ve, mand R, rib R中, Fe R・L中, rib, Hum L下・中)	不明 Ve ハリセンボン(咽頭骨)		サンゴ
	III(最下面)	リュウキュウイノシシ(焼骨) カメ(四肢－焼骨) イヌ(mand L (P_4, M_2)・R ($P_{3,4}$, $M_{1,2,3}$) max R・L (P^{34}, M^1), Rad, rib？(燃骨))			
	IV	リュウキュウイノシシ (Hum R中, Ve, Mc or Mf) イヌ(mand R, rib)		不明破片	
	IV(下面)	リュウキュウイノシシ(Tib中, Fe) イヌ (mand R (P_4, M_1), Fe) カメ(甲, 四肢)	ブダイ(dent R, Ve) 不明 Ve		
	V	リュウキュウイノシシ (rib, Mc or Mf)	サメ(Ve) 不明		ヒト(門歯？)
	V(下面)	リュウキュウイノシシ (mand 枝, Ast R) イヌ (max R (P^{34}, M^1)・L (P^{34}, M), mand L (M_1)) カメ(甲)			
307地点	表採 I・II (撹乱層)	リュウキュウイノシシ(Mc or Mf, 側頭骨 mand 内節部 L, Rad (R上・L上下), 胸椎, Ul, max, rib, Hum, Cal, Tib L下, Pel, Fe中, 四肢, 基節骨) カメ(甲, 四肢)、イヌ(Tib) ネズミ(Pel)	ヘダイ(dent ？) ブダイ(max, 上咽頭歯, 骨, 後頭部片) タイ類(max, Ve) ナンヨウブダイ(上咽頭歯)	マイマイ、チョウセンサザエ、ギンタカハマガイ、コシダカハマガイ、タカラガイ、シラクモガイ、オキニシ、貝のフタ、オオシャコガイ、ニッコウガイ科(アナアキウズガイ？)	カニ(爪)

第11表　出土自然遺物一覧表(3)

項目 / グリッド	層序	獣　　骨	魚　　骨	貝	その他、備考
305地点	表採 I・II (撹乱層)	リュウキュウイノシシ (mand, 基節骨, M, Ve, Cal L, Mc or Mf, rib, Ul, Hum 中) イヌ (Tib L下, Cal) カメ (Fe, 甲, 指骨?) クジラ	ハリセンボン類? (咽頭骨) ブダイ (Ve, dent fr, P-max) 不明 Ve	ヤコウガイ (?) フタ片 シャコガイ片	カニ (爪)

註) イノシシ：リュウキュウイノシシ

max：上顎骨　mand：下顎骨　mand 枝：下顎骨枝状部　Hum：上腕骨　Ul：尺骨

Rad：橈骨　Pel：寛骨　Fe：大腿骨　Tib：脛骨　Cal：踵骨

Ast：距骨　Mc or Mt：中手骨又は中足骨　rib：肋骨　fr：破片

M：臼歯　P：前臼歯　Ve：椎骨

R：右　L：左　ad：成獣　若：若獣

上：近位部　中：中間部　下：遠位部

基節骨：指骨のうち最も基部のもの　中節骨：指骨のうち最も中間のもの　末節骨：指骨のうち最も先端のもの

カメ

甲：甲羅片　四肢：四肢骨片

サカナ

P-max：前上顎骨　dent：歯骨

●サカナはこの2部位と咽頭歯を中心に分類

第12表　出土自然遺物一覧表(4)